

『安楽集』 訳註 (二) 第二大門

齊藤隆信・曾和義宏
加藤弘孝・永田真隆
小川法道

【凡例】

- ・底本 (㊦) には大谷大学図書館蔵順芸本 (八〇九世紀ごろに書写された高山寺旧蔵本の敷写本) を用いた
- ・校本には下記の二種を用いた
 - ㊦…元禄一一 (一六九八) 年刊、義山校本 (佛教大学図書館蔵)
 - ㊧…宝永元 (一七〇四) 年刊、道章校本 (龍谷大学図書館蔵)
- ・底本では読めないかと判断した場合に限って校本を用い、その校記を頭註に示した
- ・異体字はすべて正字に改めた
- ・本文と校記は原則として旧字体とし、現代語訳と訳註は新字体とした
- ・その他、『安楽集』の校訂に関しては『大正新脩大蔵経』四七巻、

および『浄土真宗聖典 (七祖篇)』(浄土真宗聖典編纂委員会編、一九九二年) を、また書誌に関しては『浄土教典籍目録』(佛教大学総合研究所編、二〇一一年) を参照されたい

・『安楽集』本文中の経典引用に関しては内藤知康『安楽集講説』(永田文昌堂、一九九九年) を参照した

第二大門中、有三番料簡。第一明發菩提心、第二破異見邪執、第三廣施問答釋去疑情。

就菩提心、內有四番。一出菩提心功用、二出菩提名體、三顯發心有異、四問答解釋。

第一者、大經云、凡欲往生淨土、要須發菩提心爲原云何。

菩提者乃是無上佛道之名也。若欲發心作佛者、此心廣大遍周法界。此心究竟等若虛空。此心長遠盡未來際。此心普備離二乘障。若能一發此心、傾無始生死有淪。所有功德迴向①菩提、皆能遠詣佛果、無有失滅。譬如寄花五淨、風日不萎、附水靈河、世旱無竭。

①底「向迴」
②元「迴向」

第二章のなかを三節に分類する。第一節では發菩提心を明らかにし、第二節では異見邪執を論破し、第三節では広く問答を設け疑心をとりのぞく。

〔第一節の〕菩提心について、さらに四つに分ける。一つには菩提心のはたらきを明らかにし、二つには菩提の名称と実体を明らかにし、三つには發心にはさまざまの違いがあることを明らかにし、四つには問答を通して解釈する。

第一に〔菩提心のはたらきを明らかにするとは〕、『無量壽經』に「総じて淨土に往生しようと思うならば、かならず菩提心を發することを根源としなければならぬ^①」と説かれるのはどういうことか。

菩提とはすなわちこの上ない仏というさとりの名である。菩提心を發して仏になろうと思えば、その心は広大にして法界にあまねくゆきわたる。この心は虚空のように〔空間的に〕果てしなく等しくひろがり、この心は〔時間的に〕永遠であり未來の果てまで続く。この心を完全にそなえれば声聞・緣覺という二乗に落ちる障りを離れる。もし一たびこの心を發せば、計り知れない過去から繰り返してきた迷いの境界を断ち切ることができる。あらゆる功德を菩提に回向すれば、みな遠い將來仏になることができ、〔その功德を〕失うことはない。たとえば花を五淨居天にかけば風や日にさらされても萎まないようなものであり、水を靈河に流

第二出菩提名體者、然菩提有三種。一者法身菩提、二者報身菩提、三者化身菩提。

言法身菩提者、所謂眞如實相第一義空。自性清淨體無穢染、理出天眞不假脩成、名爲法身。佛道體本名曰菩提。

言報身菩提者、備脩萬行能感報佛之果。以果酬因名曰報身。圓通無礙名曰菩提。

② ③ 「三」 ④ ⑤
「言」 「言」
言②化身菩提者、謂從報起用能赴萬機、名爲化身。益物圓通名曰菩提。

第三顯發心有異者、今謂行者脩因發心具其三種。一者要須識達有無從本已來自性清淨。二者緣脩萬行。八萬四千諸波羅蜜門等。三者大慈悲爲本、恒擬運度爲懷。此之三因能與大菩提相應。故名發菩提心。

せば干ばつでも乾かないようなものである。

第二に菩提の名称と実体を明らかにすると、そもそも菩提には三種類ある。一つには法身の菩提、二つには報身の菩提、三つには化身の菩提である。

法身の菩提というのは、いわゆる眞如、実相、第一義空である。その本性が清淨であり、その本体に穢れがなく、真理そのものであり、修行によって実現したようなものではないから法身という。仏のさとの根本を菩提という。

報身の菩提というのは、あらゆる行を修することによって報身仏という結果を感得することができる。その結果は因に報いて得られたものであるから報身というのである。さとの境地にさわりのないことを菩提という。

化身の菩提というのは、報身仏から〔衆生を救う〕はたらきを起して、あらゆる対象にむかう仏身を化身というのである。全ての衆生に恩恵を与えることが自在であることを名づけて菩提という。

第三に発心にはさまざまな違いがあることを明らかにすると、今思うに行者が因となる行を修して菩提心を発すのに次の三種をそなえなければならぬ^②。一つには、かならず有や無もそれ自体が清淨であると認識する。二つには、あらゆる行を修する。つまり八万四千のいろいろな法門である。三つには、大慈悲を根本と

又據淨土論云、今言發菩提心者、正是願作佛心。願作佛心者、即是度衆生心。度衆生心者、即攝取衆生、生有佛國土心。今既願生淨土、故先須發菩提心也。

③底「明」元宝
「者」

第四問答解釋③。問曰、若備脩萬行能感菩提得成佛者、何故諸法無行經云、若人求菩提則無有菩提。是人遠菩提、猶如天與地。

答曰、菩提正體理無求相。今作相求不當理實。故名遠也。是故經言、菩提者不可以心得、不可以身得也。今謂行者雖知脩行往求、了了識知理體無求、仍不壞假名。是故備脩萬行、故能感也。

して、つねに衆生を救済しようと心にとめる。この三つの因は大いなる菩提と一致している。だから發菩提心というのである。

また『淨土論』に次のように説かれる。「いま發菩提心というのはまさしく仏になろうと願う心のことである。仏になろうと願う心とはつまり衆生を救済しようという心である。衆生を救済しようという心とはつまり衆生を撰取して仏のまします国土に往生させようという心である」と。いま淨土に往生したいと願ったからには、まず何よりも菩提心を發さなくてはならない。

第四に問答を通して解釈する。問う。もしあらゆる行をみな修すれば、菩提を得て仏になれるというが、それならばどうして『諸法無行經』には、「もし人が菩提を求めたとしても、菩提は存在しない。この人が菩提から遠ざかることは、まるで天と地との隔たりのようである」と説かれるのか。

答える。菩提の正体は道理として相を求めない。ここで「菩提に」相を求めることは真実の道理に反する。だから遠ざかるというのである。このために『維摩詰所説經』には「菩提は心によっても得られないし、身をもつても得られない」と説かれている。今思うに、行者は修行によって菩提を求めることを知りつつも、菩提の正体は道理として求めるものではないとはつきり知れば、「菩提という」仮名を壊さない。このためにあらゆる行をみな修すれば菩提を感得できるのである。

④底「帝」⑤⑥

「諦」

是故大智度論云、若人見般若、是則爲被縛。若不見般若、是亦爲被縛。若人見般若、是則爲解脫。若不見般若、是亦爲解脫。龍樹菩薩釋云、是中不離四句者爲縛、離四句者爲解。今祈菩提但能如此脩行、即是不行而行。不行而行者、不違二諦④大道理也。

又依天親淨土論云、凡欲發心會無上菩提者有其二義。一先須離三種與菩提門相違法。二者須知三種順菩提門法。

何等爲三。一者、依智慧門不求自樂。遠離我心貪著自身故。二者、依慈悲門拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。三者、依方便門憐愍一切衆生心。遠離恭敬供養自身心故。是名遠離三種菩提門相違法。

だから『大智度論』に次のように説かれる。「もし般若を見たならばこれは縛られている。もし般若を見ていないならばこれもまた縛られている。もし般若を見たならばそれは解脫である。もし般若を見ていないならばこれもまた解脫である」と。龍樹菩薩はこれについて解釈して「このような四句分別（有・無・または有または無・有にあらざる無にあらざる）に固執することは束縛であり、四句分別から離れることが解脫なのである」と説く。いま菩提を求めて、ただこのように修行すれば、修行せずに修行をすることになる。修行せずに修行することは真俗二諦の大いなる道理にかなっている。

また天親の『浄土論』によれば次のように説かれる。「総じて菩提心を発し最上の菩提を得ようと願うことには、二つの意味がある。一つには、まず菩提門と相違する三種の法を離れなければならない。二つには、菩提門に順ずる三種の法を知らなくてはならない。

〔離れなければならない〕三種とはなんであるか。一つには智慧門により、自らの楽しみを求めない。なぜなら我心をもつて自身に執着することから離れるためである。二つには慈悲門により、一切の衆生の苦を取り除く。なぜなら衆生を安らかにしようとしていない心から離れるためである。三つには方便門により、一切の衆生を憐れむ心である。なぜなら自らを敬い養う心から離れるためである。これを菩提門と相違する三種の法から離れるというので

順菩提門者、菩薩遠離如是三種菩提門相違法、得三種隨順菩提門法。

何等爲三。一者無染清淨心。不爲自身求諸樂故。菩提是無染清淨處。若爲自身求樂、即違菩提門。是故無染清淨心是順菩提門。

⑤底「隱」(元宝)
「穩」
二者安清淨心。爲拔一切衆生苦故、菩提安穩⑤一切衆生清淨處。若不作心拔一切衆生離生死苦、即便違菩提。是故拔一切衆生苦是順菩提門。

⑥底「作」(元宝)
「依」
三者樂清淨心。欲令一切衆生得大菩提故、攝取衆生彼彼國土故。菩提是畢竟常樂處。若不令一切衆生得畢竟常樂者、則違菩提門。此畢竟常樂依何而得。要依⑥大義門。大義門者、謂彼安樂佛國是也。故令一心專至願生彼國。欲使早會無上菩提也。

ある。

菩提門に順ずるといふのは、菩薩はこのような菩提門と相違する三種の法から離れば、菩提門に隨順する三種の法を得るのである。

その三種とは何か。一つには煩惱のない清淨なる心である。なぜなら自身のためにさまざまな樂を求めないからである。菩提は煩惱のない清淨の世界である。もし自身のために樂を求めるならば、これは菩提門ではない。このため煩惱のない清淨なる心は菩提門に順ずるのである。

二つには安穩で清淨なる心である。なぜなら一切の衆生の苦を取り除こうとするからである。菩提は一切の衆生を安穩にする清淨なる世界である。もしその心を発さず、一切の衆生を生死の苦から離れさせないのであれば、これは菩提門ではない。このため一切の衆生の苦を取り除くことは菩提門に順ずるのである。

三つには安樂を与える清淨なる心である。なぜなら一切の衆生に大いなる菩提を得させようとするためであり、また衆生を攝取して淨土に往生させるためである。菩提は究極の永遠なる樂の世界である。もし一切の衆生に究極の永遠なる安樂を得させなければ、それは菩提門ではない。この究極の永遠なる安樂はなにによって得られるのか。「それは」かならず大乘の法門によって得られる。大乘の法門というのは阿弥陀仏の極樂〔に至る法門〕である。だ

⑦底「提」元⑤

「薩」

⑧底欠損元⑤

「不」

第二明破異見邪執者、就中有其九番。第一、破妄計

大乘無相異見偏執。第二、會通菩薩⑦愛見大悲。第

三、破繫心外無法。第四、破願生穢國不願往生淨土。

第五、破若生淨土多喜著樂。第六、破求生淨土非是

小乘。第七、破求生兜率勸不⑧歸淨土。第八、會通

若求生十方淨土不如歸西。第九、料簡別時之意。

第一、破大乘無相妄執者、就中有二。一總生起。欲

令後代學者明識是非去耶向正。第二、廣就繫情、顯

正破之。一總生起者。然大乘深藏名義塵沙。是故涅

槃經云、一名無量義、一義無量名。要須遍審衆典方

曉部旨。非如小乘俗書案文畢義。何意須然。但淨土

幽廓經論隱顯、致令凡情種種圖度。恐涉詔語刀刀百

盲偏執、雜亂無知妨礙往生。今且舉少狀一一破之。

から一心に専ら極樂に往生しようと願わせるのである。早く最上の菩提を得させようと願うためである」と。

第二節に異見邪執を論破することを明らかにするなかでさらに九つに分ける。第一には大乘で説かれる無相についての異見偏執を論破する。第二には菩薩の愛見が大悲心によるものであることを矛盾なく解釈する。第三には心の外に法がないとの執着を論破する。第四には穢國に生まれたいと願い、淨土に往生したいと願わないことを論破する。第五には淨土に往生すると、喜びが多いため樂に執着するという誤った考えを論破する。第六には淨土に往生しようというのは小乗ではないかという誤った考えを論破する。第七には兜率天に往生を求め、極樂を執り所とさせないことを論破する。第八にはもし十方のさまざまな淨土に往生しようと求めるならば、極樂に往生するには及ばないということを矛盾なく解釈する。第九には別時意について解釈する。

第一に大乘で説かれる無相に対する「異見」妄執を論破するなかでさらに二つに分ける。第一には総生起である。後代の学者が明確に是非について知り、誤った見解をとりのぞいて、正しい見解に向かうようにする。第二には広く執着に対して正しい見解を示してこれを論破する。第一に総生起とは、大乘の奥深い法蔵には名称と意味が数多くある。このために『大般涅槃經』には次のように説かれる。「一つの名称には多くの意味あり、一つの意味には多くの名称がある」と。かならずあらゆる經典をくまなく調べ

て、部類や教旨明らかにすべきである。文を勘案して意味を理解するだけの小乗の經典や俗書と同じではない。どういいうわけでそうしなければならぬのか。ただ浄土（の教え）は深淵にして經論に見え隠れするために、凡夫の考えではさまざまに推量させられるからである。おそらくは「『大般涅槃經』にあるように刀に執着するあまり」寢言に刀、刀といたり、「『長阿含經』にあるように」百人の盲人が「象の一部に触れて」執着をしたりするうちに、心が乱れて無知であるために往生が妨害される。いまから少し例を挙げて一つ一つこれを論破しよう。

第一に大乘で説かれる無相について誤った考えをめぐらすことを論破する^⑨。次のような問いがある。ある人がいうに、「大乘は無相を説くので彼と此の違いを論じてはいけない。もし浄土に往生しようとするならば、これは相に執着することであり、いよいよ束縛を増すことになる。どうしてこれ（往生浄土）を求めるのだろうか」と。答える。このような考えはまったく正しくはない。なぜならば、すべての仏の説法はかならず二つの縁をそなえているからである。一つには法性の真理による。二つには真俗二諦による。彼が考える大乘無相はただ法性によるものである。しかし「彼は」批判して縁によって求めようとしない。これは真俗二諦に随順しない。このような見解では空についての誤った考えである滅空に陥ってしまう。

このため『無上依經』には次のように説かれる。「仏は阿難に次

第一破妄計大乘無相者。問曰、或有人言、大乘無相勿念彼此。若願生淨土、便是取相、轉增漏縛。何用求之。答曰、如此計者將謂不然。何者、一切諸佛說法要具二縁。一依法性實理。二須順其二諦^⑨。彼計大乘無念但依法性。然謗無縁求。即是不順二諦^⑩。如此見者墮滅空所收。

⑨底「帝」元宝

「諦」

⑩底「帝」元宝

「諦」

是故無上依經云、佛告阿難。一切衆生若起我見如須

⑪底「計」(元宝)

「許」

⑫底「帝」(元宝)

「諦」

彌山、我所不懼。何以故、此人雖未即得出離、當不壞因果不失果報故。若起空見如芥子。我即不許^⑪。何以故。此見者破喪因果多墮惡道。未來生處必背我化。今勸行者。理雖無生、然二諦^⑫道理非無緣求一切得往生也。

⑬底「際」(元宝)
「證」

是故維摩經云、雖觀諸佛國及與衆生空、而常脩淨土教化諸群生。又彼經云、雖行無作而現受身。是菩薩行。雖行無起而起一切善行。是菩薩行。是其眞證^⑬也。

問曰、今世間有人、行大乘無相亦不存彼此、全不護戒相。是事云何。答曰、如此計者、爲害滋甚。何者、如大方等經云。佛爲優婆塞制戒。不得至寡婦處女家、沽酒家藍染家押油家熟皮家。悉不得往來。阿難白佛

のように告げられた。へ一切の衆生のなかでもし我があると執着する見解をおこすことが須彌山のように大きいとしても、私は恐れない。なぜかといえば、この人はまだ迷いの境界を離れることができないけれども、因果を否定せず、果報を失わないはずだからである。もし一切は空であると執着する見解をおこすことが芥子のように小さいとしても、私は認めない。なぜかといえば、この見解は因果を破ることとなり、多くのものは悪道に落ちるからである。未来の生存においてかならず私の教えに背くこととなる^⑭」と。いま行者に勧める。「法性の」道理からすれば無生であるといつても、真俗二諦の道理からすれば必ず縁によって求めるからすべてのものが往生できる。

このため『維摩詰所説經』には次のように説かれる。「もろもろの仏国土と衆生は空であると観ずるけれども、つねに淨土に至る行を修して、もろもろの衆生を教化する^⑮」と。また同じく『維摩詰所説經』に次のように説かれる。「無作を行ずるといつても身を受ける。これが菩薩の行である。無起を行ずるといつても一切の善行をおこす。これが菩薩の行である^⑯」と。これがその眞の証である。

問う。いま世間に大乘で説かれる無相を行じ、また彼此の概念を認めず、まったく戒をまもらない人がいる。この事はどうかだろうか。答える。このような考えは害をなすことがはなはだしい。なぜかといえば、『大方等陀羅尼經』に次のように説かれる。「仏は

言、世尊爲何等人制如斯戒。佛告阿難、行有二種。一者在世人行、二者出世人行。出世人者、吾不制上事、在世入者、吾今制之。何以故、一切衆生悉是吾子。佛是一切衆生父母。遮制約勒、早出世間得涅槃故。

第二會通菩薩愛見大悲者、問曰、依大乘聖敎、菩薩於諸衆生、若起愛見大悲、即應捨離。今勸衆生共生淨土、豈非愛染取相。若爲免其塵累也。

答曰、菩薩行法功用有二。何者爲二、一證空慧波若、二具大悲。一以脩空慧波若力故。雖入六道生死、不爲塵染所繫。二以大悲念衆生故、不住涅槃。菩薩雖處二諦、常能妙捨有無。取捨得中不違大道理也。是故維摩經云、譬如有人欲於空地造立宮舍、隨意無礙。

優婆塞のために戒を作った。〈寡婦や処女のいる家、酒を売る家、藍染をする家、油をしぼる家、皮をなめす家に入ってはならない。すべて行き来してはならない。〉と。阿難は仏に次のように申し上げた。〈世尊どのような人のためにこのような戒を制定されたのですか。〉と。仏は阿難に次のように告げられた。〈行に二種類がある。一つには世間の人の修行で、二つには出世間の人の修行である。出世間の人には、さきほどの事を制定することはないが、世間の人に対してはこれを制定した。なぜなら、すべての衆生は私の子である。仏はすべての衆生の父母である。悪をさえぎりとどめるべく誠めれば、早く迷いの境界を出て、涅槃を得られるからである。〉⁽¹⁷⁾と。

第二に菩薩の愛見が大悲心によるものであることを矛盾なく解釈するとは、問う。大乘の聖敎によると、「菩薩が衆生に対してもし愛見の大悲心を起こしたならば、それは捨離しなければならぬ⁽¹⁸⁾。」と。いま衆生とともに淨土に往生することを勧めるのは、愛着によって相にとらわれているのではないか。(そのようなことと) どうして煩惱を離れることができるのか。

答える。菩薩の修行のはたらきに二つある。その二つとは、一つには空の道理を悟る智慧を得ることであり、二つには大悲心を得ることである。一つには空の道理を悟る智慧のために、六道の迷いの境界に入っても、煩惱に染まり束縛されるということはない。二つには大悲心によって衆生を念ずるために「自分だけが」涅槃

若於虚空終不能成。菩薩亦復如是。爲欲成就衆生故、願取佛國。願取佛國者、非於空也。

第三破繫心外無法者、就中有二。一破計情、二問答解釋。問曰、或有人言、所觀淨境約就内心、淨土融遍。心淨即是、心外無法。何須西入。

答曰、但法性淨土、理處虛融、體無偏局。此乃無生之生、上土堪入。是故無字寶篋經云。善男子復有一法。是佛所覺。所謂諸法不去不來、無因無緣、無生無滅、無思不思、無增無滅^⑭。佛告羅睺羅言。汝今受持我此所說正法義不。爾時十方有九億菩薩。即白佛言、我等皆能持此法門。當爲衆生流通不絕。世尊答言、是善男子等則爲兩肩荷擔菩提。彼人則得不斷

⑭底「感」元宝
「滅」

の境地にとどまることはない。菩薩は真俗二諦によっていつもうまく有無を捨てるが、取捨して中道を得て、大いなる道理にそむかない。このために『維摩詰所説經』に次のように説かれている。「たとえば空き地に宮舎を造立しようと思えば、思い通りにできず、何のさわりもない。しかし虚空には「宮舎を」造立することはできない。菩薩もまたこれと同じである。衆生を救済しようとして仏国土の建立を願うのである。仏国土を建立するのは虚空においてではない^⑮。」と。

第三に心の外に法がないとの執着を論破するとは、そのなかでさらに二つに分ける。一つにはこのような誤った見解について論破し、二つには問答を通して解釈する。問う。ある人が次のように言う。「観察の対象である浄土の境界は心におさまっているので、浄土と心は一つにとけあっている。心が清浄ならば浄土も清浄であり、心の外に法はない。どうして西方極樂浄土に往生する必要があるのであるのだろうか」と。

答える。ただ法性の浄土は、その真理はあらゆるところに行き渡り、その本体は偏りなく制限されない。これは無生の生であり、聖者（上輩の者）だけが往生することができる。このために『無字宝篋經』に次のように説かれる。「善男子よ、また一つの教えがある。これは仏が覚られたことである。一切の法は去らず来たらず・因なく縁なく・生せず滅せず・思うことなく思わず・増なく減なし。仏は羅睺羅に次のように告げられた。へあなたはいま

辨才、得善清淨諸佛世界。命終之時則得現見阿彌陀佛與諸聖衆住其人前、得往生也。

自有中下之輩、未能破相、要依信佛因緣求生淨土。雖至彼國、還居相土。又云。若攝緣從本、即是心外無法。若分二諦明義、淨土無妨是心外法也。

二問答解釋。問曰、向言無生之生唯上土能入、中下不堪者、爲當直將人約法作如此判、爲當亦有聖教來證。

私が説いたところの正しい教えを受けとって、たもっているだろうか」と。その時に十方にいる九億もの菩薩が仏に次のように申し上げた。「我々はみなこの教えをたもっている。きっと衆生のために教えを広めて途絶えないようにするだろう」と。世尊は次のように告げられた。「この善男子たちは両肩に菩提という重責をかついでいる。この人は不断弁才」といいういかなる難問にも屈することがない弁舌の力」を得て、善にして清淨である諸仏の世界に往生できる。命の終わる時に阿彌陀仏ともろもろの聖衆がその人の前に立たれるのを見ることができて、往生することができる²⁰と。

中輩と下輩の者は、いまだ相に執着しているけれども、必ず仏を信じるという因縁によって淨土に往生しようと求める。「この人は」淨土に至るといつても、その淨土は相のある淨土である。また次のように言う。「もし因縁の立場（俗諦）をおさめて、根本の立場（真諦）によれば心の外に法はない。「しかし」もし真俗二諦を分けてその教えを明らかにすれば、淨土が心の外の法であるということ妨げるものではない」と。

二つに問答を通して解釈する。問う。前に「無生の生（法性の淨土）にはただ上輩のみが往生でき、中輩・下輩には無理である」といったのは、人によって法に照らし合わせてこのような判定をするのか、それとも聖教の中に根拠があるのか。

答曰、依智度論云、新發意菩薩機解軟弱、雖言發心、多願生淨土。何意然者、譬如嬰兒若不近父母恩養、或墮阨落井、火蛇等難、或乏乳而死。要假父母摩洗養育、方可長大能紹繼家業。菩薩亦爾。若能發菩提心、多願生淨土、親近諸佛增長法身、方能逕紹菩薩家業、十方濟運。爲斯益故、多願生也。

⑮底 「可可」 ⑰
⑱ 「可」

又彼論云、譬如鳥子翹翹未成、不可逼令高翔。先須依林傳樹、羽成有力方可⑮捨林遊空。新發意菩薩亦爾。先須乘願求生佛前。法身成長隨感赴益。

又阿難白佛言、此無相波羅蜜在何處說。佛言、如此法門在阿毘跋致地中說。何以故。有新發意菩薩。聞此無相波羅蜜門。所有清淨善根悉當滅沒也。又來但

答える。『大智度論』によると次のように説かれている。「菩提心をおこしたばかりの菩薩は理解が乏しく、発心するといつても多くは淨土に往生したいと願う。どうしてそうなるかといえは、たとえば幼子が父母によって大事に育てられなければ、穴や井戸に落ちたり火傷や蛇におそわれるといった災難にあつたり、あるいは母乳が乏しくて死んでしまうこともある。もし父母が「幼子を」なでたり洗つたり養育すれば成長して家業を継承できるようになる。菩薩もまた同様である。もしよく菩提心をおこして、多くが淨土に往生し、諸仏に親しく近づき修行を増進させたいと願えば、菩薩の家業をすぐさま継承し、十方の衆生を救済することができる。この利益のために多くが往生したいと願う」と。

またこの『大智度論』に次のように説かれる。「たとえば小鳥の羽根がまだ十分に成長していなければ、高く飛ばせることはできない。まずは林において木々を拠り所としていかねばならない。羽根が成長して力がついてくれば林から飛び立ち自由に空を飛ぶことができるのと同じである。菩提心をおこしたばかりの菩薩もまた同様である。まずは願いのままに仏前に往生することを求めなければならぬ。「そうすれば」修行が進んで十方の衆生の求めに応じて利益を与える「ことができる」。

また阿難は仏に次のように申し上げた。へこの無相の修行はどのような対象に説かれるのでしょうかへ仏は次のようにおっしゃつた。へこのような法門は、不退転の菩薩に対して説いている。な

至彼國。即一切事畢何用諍此深淺理也。

第四破願生穢土不願生淨土者、問曰、或有人言、願生穢國教化衆生、不願往生淨土。是事云何。

答曰、此人亦有一徒。何者。若身居不退已去、爲化雜惡衆生故。能處染、逢惡不變。如鵝鴨入水、水不能濕。如此人等堪能處穢拔苦。若是實凡夫者、唯恐自行未立、逢苦即變、欲濟彼者、相與俱沒。如似逼雞入水、豈能不濕。

①⑥ ①⑦ 「水」 ①⑧ 「氷」

是故智度論云、若凡夫發心即願在穢土拔濟衆生者、聖意不許。何意然者。龍樹菩薩釋云。譬如四十里氷①⑥、如有一人、以一升熱湯投之、當時似如少減、若經夜至明、乃高於餘者。凡夫在此發心救苦亦復如是。

ぜかという菩提心をおこしたばかりの菩薩がこの無相の修行を聞いたならば、あらゆる清淨の善根をことごとくなくしてしまうからである」と。また淨土に至れば、一切のことが成就する。②④ ②⑤ ②⑥ ②⑦ ②⑧ ②⑨ ③① ③② ③③ ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑩① ⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑪① ⑪② ⑪③ ⑪④ ⑪⑤ ⑪⑥ ⑪⑦ ⑪⑧ ⑪⑨ ⑫① ⑫② ⑫③ ⑫④ ⑫⑤ ⑫⑥ ⑫⑦ ⑫⑧ ⑫⑨ ⑬① ⑬② ⑬③ ⑬④ ⑬⑤ ⑬⑥ ⑬⑦ ⑬⑧ ⑬⑨ ⑭① ⑭② ⑭③ ⑭④ ⑭⑤ ⑭⑥ ⑭⑦ ⑭⑧ ⑭⑨ ⑮① ⑮② ⑮③ ⑮④ ⑮⑤ ⑮⑥ ⑮⑦ ⑮⑧ ⑮⑨ ⑯① ⑯② ⑯③ ⑯④ ⑯⑤ ⑯⑥ ⑯⑦ ⑯⑧ ⑯⑨ ⑰① ⑰② ⑰③ ⑰④ ⑰⑤ ⑰⑥ ⑰⑦ ⑰⑧ ⑰⑨ ⑱① ⑱② ⑱③ ⑱④ ⑱⑤ ⑱⑥ ⑱⑦ ⑱⑧ ⑱⑨ ⑲① ⑲② ⑲③ ⑲④ ⑲⑤ ⑲⑥ ⑲⑦ ⑲⑧ ⑲⑨ ⑳① ⑳② ⑳③ ⑳④ ⑳⑤ ⑳⑥ ⑳⑦ ⑳⑧ ⑳⑨ ㉑① ㉑② ㉑③ ㉑④ ㉑⑤ ㉑⑥ ㉑⑦ ㉑⑧ ㉑⑨ ㉒① ㉒② ㉒③ ㉒④ ㉒⑤ ㉒⑥ ㉒⑦ ㉒⑧ ㉒⑨ ㉓① ㉓② ㉓③ ㉓④ ㉓⑤ ㉓⑥ ㉓⑦ ㉓⑧ ㉓⑨ ㉔① ㉔② ㉔③ ㉔④ ㉔⑤ ㉔⑥ ㉔⑦ ㉔⑧ ㉔⑨ ㉕① ㉕② ㉕③ ㉕④ ㉕⑤ ㉕⑥ ㉕⑦ ㉕⑧ ㉕⑨ ㉖① ㉖② ㉖③ ㉖④ ㉖⑤ ㉖⑥ ㉖⑦ ㉖⑧ ㉖⑨ ㉗① ㉗② ㉗③ ㉗④ ㉗⑤ ㉗⑥ ㉗⑦ ㉗⑧ ㉗⑨ ㉘① ㉘② ㉘③ ㉘④ ㉘⑤ ㉘⑥ ㉘⑦ ㉘⑧ ㉘⑨ ㉙① ㉙② ㉙③ ㉙④ ㉙⑤ ㉙⑥ ㉙⑦ ㉙⑧ ㉙⑨ ㉚① ㉚② ㉚③ ㉚④ ㉚⑤ ㉚⑥ ㉚⑦ ㉚⑧ ㉚⑨ ㉛① ㉛② ㉛③ ㉛④ ㉛⑤ ㉛⑥ ㉛⑦ ㉛⑧ ㉛⑨ ㉜① ㉜② ㉜③ ㉜④ ㉜⑤ ㉜⑥ ㉜⑦ ㉜⑧ ㉜⑨ ㉝① ㉝② ㉝③ ㉝④ ㉝⑤ ㉝⑥ ㉝⑦ ㉝⑧ ㉝⑨ ㉞① ㉞② ㉞③ ㉞④ ㉞⑤ ㉞⑥ ㉞⑦ ㉞⑧ ㉞⑨ ㉟① ㉟② ㉟③ ㉟④ ㉟⑤ ㉟⑥ ㉟⑦ ㉟⑧ ㉟⑨ ㊱① ㊱② ㊱③ ㊱④ ㊱⑤ ㊱⑥ ㊱⑦ ㊱⑧ ㊱⑨ ㊲① ㊲② ㊲③ ㊲④ ㊲⑤ ㊲⑥ ㊲⑦ ㊲⑧ ㊲⑨ ㊳① ㊳② ㊳③ ㊳④ ㊳⑤ ㊳⑥ ㊳⑦ ㊳⑧ ㊳⑨ ㊴① ㊴② ㊴③ ㊴④ ㊴⑤ ㊴⑥ ㊴⑦ ㊴⑧ ㊴⑨ ㊵① ㊵② ㊵③ ㊵④ ㊵⑤ ㊵⑥ ㊵⑦ ㊵⑧ ㊵⑨ ㊶① ㊶② ㊶③ ㊶④ ㊶⑤ ㊶⑥ ㊶⑦ ㊶⑧ ㊶⑨ ㊷① ㊷② ㊷③ ㊷④ ㊷⑤ ㊷⑥ ㊷⑦ ㊷⑧ ㊷⑨ ㊸① ㊸② ㊸③ ㊸④ ㊸⑤ ㊸⑥ ㊸⑦ ㊸⑧ ㊸⑨ ㊹① ㊹② ㊹③ ㊹④ ㊹⑤ ㊹⑥ ㊹⑦ ㊹⑧ ㊹⑨ ㊺① ㊺② ㊺③ ㊺④ ㊺⑤ ㊺⑥ ㊺⑦ ㊺⑧ ㊺⑨ ㊻① ㊻② ㊻③ ㊻④ ㊻⑤ ㊻⑥ ㊻⑦ ㊻⑧ ㊻⑨ ㊼① ㊼② ㊼③ ㊼④ ㊼⑤ ㊼⑥ ㊼⑦ ㊼⑧ ㊼⑨ ㊽① ㊽② ㊽③ ㊽④ ㊽⑤ ㊽⑥ ㊽⑦ ㊽⑧ ㊽⑨ ㊾① ㊾② ㊾③ ㊾④ ㊾⑤ ㊾⑥ ㊾⑦ ㊾⑧ ㊾⑨ ㊿① ㊿② ㊿③ ㊿④ ㊿⑤ ㊿⑥ ㊿⑦ ㊿⑧ ㊿⑨

第四に穢土に生まれようと願って、淨土に往生しようと願わないことを論破するとは、問う。ある人が「穢國に生まれて衆生を教化しようと願って、淨土に往生することを願わない」と言う。この事はどうか。

答える。この人には一徒〔がいるという考え〕がある。何であるか。もし不退轉の位にいたってからは、雜惡の衆生を教化するために、煩惱の世界にとどまって、惡に遇うけれども変わることがない。鵝鴨が水の中にいるけれども、水に濡れないのと同様である。このような人々は穢土において〔衆生の〕苦を取り除くことができる。もし本当の凡夫であれば、おそらく自分の修行も成り立たず、苦に遇えば変化し、人々を救おうとすれば自身もともに苦に沈んでしまう。鶏を追いついて水に入れるようなもので、どうして水に濡れないようにできようか。

このために『大智度論』に次のように説かれる。「もし凡夫が発心して穢土にいながらにして衆生を救済しようと願ったとしても、仏はお許しにはならない」と。なぜかといえ、龍樹菩薩が次のように解釈されている。「たとえば四十里の氷に、ある人が一升

以貪瞋境界違順多故、自起煩惱返墮惡道故也。

第五破若生淨土多喜著樂者、問曰、或有人言、淨土之中唯有樂事、多喜著樂妨廢修道。何須願往生也。

答曰、既云淨土、無有衆穢。若言著樂、便是貪愛煩惱。何名爲淨。是故大經云、彼國人天往來進止情無所繫。又四十八願云、十方人天來至我國、若起想念貪計身者、不取正覺。大經又云、彼國人天無所適莫。何有著樂之理也。

第六破求生淨土非是小乘。問曰、或有人言、求生淨

の熱湯をかけたとすれば、その時は少し水がとけるようではあるが、もし一夜を経て朝になれば、他の部分よりも「一升分」氷の高さがますますなるものである。凡夫が穢土において発心して衆生の苦を取り除こうとすることも、またこれと同様である。貪瞋の境界〔である穢土〕では心になつたりかなわなかつたりすることが多いので、自ら煩惱をおこして、かえって悪道に墮ちるからである⁽²⁸⁾と。

第五にもし淨土に往生すれば、喜びが多く樂に執着してしまうということを論破するとは、問う。ある人が「淨土のなかにはただ樂のみがあつて、喜びが多く樂に執着するため仏道修行が妨げられ廢れてしまう。どうして往生を願うべきであろうか」と言う。

答える。すでに淨土という以上、一切の穢れはない。もし樂に執着すれば、それはつまり貪愛の煩惱である。どうして淨土と名付けられようか。このために『無量壽經』には次のように説かれている。「淨土の人天は、どこにいこうとも、執着することがない⁽²⁹⁾」と。また四十八願には次のように説かれている。「私の淨土に往生した十方の人天が、もし想念をおこしてその身に執着するならば、私は正覺をとらない⁽³¹⁾」と。『無量壽經』にまた次のように説かれている。「淨土の人天は好き嫌いとらわれない⁽³²⁾」と。だからどうして樂に執着する⁽³³⁾という道理があるうか。

第六に淨土に往生しようと求めるのは小乗の教えではあるまいか⁽³⁴⁾、

土便是小乘。何須脩之。

答曰、此亦不然。何以故、但小乘之教一向不明生淨土也。

第七會通願生兜率歸淨土者、問曰、或有人言、願生兜率不願歸西。是事云何。

答曰、此義不類。少分似同、據體大別。有其四種。何者、一彌勒世尊爲其天衆轉不退法輪。聞法生信者獲益、名爲似同。著樂無信者、其數非一。又來雖生兜率、位是退處。是故經云、三界無安、猶如火宅。

⑰底 「三」 ⑳宝
なし

二往生兜率、止得壽命⑰四千歲、命終之後不免退落。

ということを論破する。問う。ある人が次のように言う。「淨土に往生しようと求めるのは小乗の教えである。どうしてこれを修するべきであろうか」と。

答える。これもまた間違いだである。なぜならば小乗の教えには全く淨土に往生するを説いていないからである。

第七に兜率天に往生しようと願うものに対して、淨土に往生することを勧めるのを矛盾なく解釈する。問う。ある人が次のように言う。「兜率天に往生しようと願い、極樂に往生することは願わない」と。この事はどうだろうか。

答える。この意味は異なる。少しは類似点があるものの、その実体は大いに異なる。その相違点に四種ある。なにかというと、まず一つ目に彌勒世尊は兜率天の神々のために不退の利益を得る法を説く。法を聞いて信じるものは利益を得ることは「淨土と」同じようなものである。「しかし」樂に執着して信じないものが少なからずいる。また兜率天に往生するといっても、その位が退転する境界でもある。このために『妙法蓮華經』には次のように説かれる。「三界に安樂はない、まるで火に飲まれた家のようにである」³⁴と。

二つ目には兜率天に往生すればわずかに四千歳の寿命を得るが、命終の後退転することを免れない。

三兜率天上雖有水鳥樹林和鳴哀雅、但與諸天生樂爲緣、順於五欲不資聖道。若向彌陀淨國一得生者。悉是阿毘跋致。更無退人與其雜居。又復位は無漏、出過三界、不復輪迴。論其壽命、即與佛齊、非算數能知。其有水鳥樹林、皆能說法、令人悟解證會無生。

四據大經、且以一種音樂比較者。經讚言、

從世帝王至六天、音樂轉妙有八重。

⑱底「欠損」⑲宝

「妙」

⑲底「動」⑲元「樂」

⑲宝「勳」

展轉勝前億萬倍。寶樹音麗倍亦然。復有自然妙⑱伎樂、法音清和悅心神。

哀婉雅亮超十方。是故稽首清淨動⑲。

⑳底「教」⑲宝
「按」

第八按⑳量願生十方淨土不如歸西方者、問曰。或有
人言、願生十方淨國。不願歸西。是義云何

三つ目には兜率天には水・鳥・樹林の奏でる音が調和していて趣き深く優雅であるけれども、ただ諸天の樂を生じる縁となり、五感を満足させるだけで仏道修行の助けとはならない。もし阿弥陀仏の淨土にひとたび往生するならば、みな不退轉の位に入る。迷いの境界に退轉する者と二度と雜居することはない。また迷いや欲望がなく三界を超越しているので再び輪廻することはない。その壽命についていえば阿弥陀仏と同じであり、数えることはできない。水・鳥・樹林はみな佛法を説いて、それを聞く者は理解し、無生法忍を悟る。

四つ目には『無量壽經』³⁵から一種の音樂を取り上げて比較すると、『讚阿弥陀仏偈』に次のように説かれている。

この世の帝王から六欲天に至るまで、音樂は次第に優れて八段階である。

順次に下位の境界よりも勝れること億万倍である。〔極樂の〕寶樹の音の麗しさもまたそのとおり（億万倍）である。

また自然の素晴らしい音樂があつて、法を説く音は清らかで調和しており心を悦ばせる。

趣き深く優雅であることは十方世界〔の音樂〕に超え優れている。このために清淨な功德のある仏に深く礼したてまつる。³⁶

第八に十方の淨土に往生しようと願うことは、西方淨土に往生するのに及ばないということについて比較検討するには、問う。ある人が次のように言う。「十方の淨土に往生しようと願ひ、西方

答曰、此義不類。於中有三。何者。一十方佛國非爲不淨。然境寬則心昧。境狹則意專。是故十方隨願往生經云、普廣菩薩白佛言、世尊十方佛土皆爲嚴淨。何故諸經中偏歎西方阿彌陀國勸往生也。佛告普廣菩薩、一切衆生濁亂者多、正念者少。欲令衆生專志有在。是故讚歎彼國爲別異耳。若能依願修行、莫不獲益。

二、十方淨土雖皆是淨而深淺難知。彌陀淨國乃是淨土之初門。何以得知。依華嚴經云、娑婆世界一劫當極樂世界一日一夜。極樂世界一劫當袈裟幢世界為一日一夜。如是優劣相望乃有十阿僧祇。故知爲淨土初門。是故諸佛偏勸。餘方佛國都不如此丁寧。是故有信之徒多願往也。

淨土に往生しようとは願わない」と。これはどうだろう。

答える。この意味は異なる。その中に三つある。なにかというと、一つには十方の淨土も不淨であるわけではない。けれどもその対象が広げれば意識は散漫となり、その対象が狭ければ意識を集中することができる。このために『十方隨願往生經』は次のように説かれている。「普廣菩薩が仏に次のように申し上げた。(世尊よ、十方の仏国土はすべて嚴かで淨らかであります。どうして諸經のなかで西方阿彌陀仏の淨土のみを讚歎して往生を勧められるのでしょうか)と。仏は普廣菩薩に次のように告げられた。(一切衆生は心が濁り乱れているものが多く、正念のものは少ない。衆生に専ら心を一つに集中させたいと思う。このために西方阿彌陀仏の淨土のみを特別に讚歎するのだ。西方極樂淨土への往生を願って修行すれば、必ず利益を獲る)」と。

二つには十方の淨土はすべて淨らかであるが、その淨らかさの深淺を知るのは難しい。阿彌陀仏の淨土はあらゆる淨土の入り口である。どうして知ることができるかというと『華嚴經』に次のように説かれている。「娑婆世界の一日一夜は極樂世界の一日一夜にあたる。極樂世界の一日一夜は袈裟幢世界の一日一夜にあたる。このように優劣を互いに見ていくと、「諸仏国土の時間の觀念には」十阿僧祇劫の「諸仏国土の」違いがある」と。だから淨土の入り口とするのである。このために諸仏は専ら阿彌陀仏の淨土を勧められる。その他の仏国はすべてこのように念入りには勧められない。

このために信のあるものの多くは極楽往生を願う。

三には〔前述のように〕阿弥陀仏の浄土はあらゆる浄土の入り口であるが、娑婆世界は穢土の終わる所である。どうして知ることができるといふと、『正法念処経』に次のように説かれている。

「ここより東北に一つの世界があり斯訶という。大地はただ三角の沙石だけがある。一年に三度しか雨がふらず、一度の雨は（深さ）五寸を潤すにすぎない。その国土の衆生はただ草や実を食べ、樹皮を衣服とし、生を求めても生を得られず、死を求めても死を得ることはできない。また一つの世界がある。虎や狼といった禽獣や蛇や蝸のすべてに羽根があり飛行している。出会ったものは互いに食い合い、善悪を選ばない」と。これをどうして穢土の始まる所と名づけないだろうか。しかるに娑婆世界は〔善悪の〕報いによって〔凡夫と〕賢聖が共に住んでいる。これによると〔娑婆世界は〕穢土の終わる所である。安樂世界は浄土の入り口であるから、この世界と境目が接することになる。往生はとも容易である。どうして〔阿弥陀仏の浄土へと〕往かないということがあるだろうか。

第九に『撰大乘論』とこの『観無量寿経』とが相違するので、別時意の語について解釈してみると、いま『観無量寿経』のなかで仏が次のように説かれている。「下品の人は確かに重罪を造っているが、命終の時に善知識に遇い十念を成就して往生することができる」と。〔それに対して〕『撰大乘論』には「仏の別時意の語

三彌陀淨國既是淨土初門、娑婆世界即是穢土末處。

何以得知、如正法念經云。從此東北有一世界、名曰

斯訶。土田唯有三角沙石。一年三雨、一雨濕潤不過

五寸。其土衆生唯食草子、樹皮爲衣。求生不得、求

死不得。復有一世界。一切虎狼禽獸^{②①}乃至蛇蝸、悉

皆有翅飛行。逢者^{②②}相噉、不簡善惡。此豈不名穢土

始處。然娑婆依報乃與賢聖同流。唯^{②③}此乃是穢土終

處。安樂世界既是淨土初門、即與此方境次相接。往

生甚便。何不去也。

②①底「狩」元宝

「獸」

②②底「著」元宝

「者」

②③底「准」元

「準」元宝「唯」

第九據攝論與此經相違料簡別時意語者。今觀經中佛說、下品生人現造重罪。臨命終時遇善知識、十念成就即得往生。依攝論云、善佛別時意語。

又來通論之家多判此文云、臨終十念但得作往生因。未即得生。何以得知。論云、如以一金錢買得千金錢、非一日即得。故知十念成就者但得作因、未即得生。故名別時意語。

如此解者將爲未然。何者、凡菩薩作論釋經、皆欲遠扶佛意契會聖情。若有論文違經者、無有是處。

今解別時意語者、謂佛常途說法皆明先因後果。理數炳²⁴然。今此經中但說一生造罪、臨命終時十念成就即得往生、不論過去有因無因者、直²⁵是世尊引接當來造惡之徒²⁶、令其臨終捨惡歸善²⁷乘念往生、是以隱其宿因、此是世尊隱始顯終。沒因談果。名作別時意語。

- ②4 底 「恒」 元 宝
「炳」
②5 底 「宜」 元 宝
「直」
②6 底 「往」 元 宝
「徒」
②7 底 虫 損 元 宝

なり^④」と説かれている。

また『撰大乘論』を研究する者の多くがこの文を解釈して次のようにいう。「臨終の十念はただ往生の因とはなるが、すぐには往生することはできない。どうしてわかるかといえ、『撰大乘論』に《一の金錢を元手に千の金錢を商売で得るのに、一日では得られないようなものである》^④と説かれている。だから十念成就はただ「往生の」因となることができても、すぐに往生することはできないとわかるのだ。よって別時意の語というのである」と。

このように解釈することは正しくない。なぜかという、そもそも菩薩が論を作つて經典を解釈することは、どれも奥深い仏意を明らかにして仏の聖なる思し召しにかないたいと願うからである。もし菩薩の論の文が經典と相違することがあれば、このような道理がないことになる。

いま別時意の語を解釈すると、仏の通常の説法はみな先に因を説き後に果を明かす。道理がはつきりとしてわかりやすい。「ところが」いまこの『觀無量壽經』のなかで、一生の間に罪を造つて、命終の時に十念成就して往生できると説いて、過去における「往生の」因の有無を論じないのは、ただ世尊が未来に悪を造る衆生を導いて、その衆生に対して臨終に悪を捨てて善に帰させて念仏によつて往生させるためである。このために過去における往生の因を隠すのである。これは世尊が始めを隠して終りを明らかにし、

「善」

何以得知。但使十念成就。皆有過因。如涅槃經云、若人過去已曾供養半恒河沙諸佛。復經發心。而能於惡世中聞說大乘經教。但能不謗。未有餘功。若經供養一恒河沙諸佛。及經發心。然後聞大乘經教。非直不謗。復加愛樂。

以此諸經來驗、明知十念成就者皆有過因不虛。若彼過去無因者。善知識尚不可逢遇。何況十念而可成就也。論云、以一金錢買得千金錢非一日即得者。若據佛意、欲令衆生多積善因、便²⁸乘念往生。若望論主、乘閉²⁹過去因、理亦無爽。若作此解、即上順佛經、下合³⁰論意。即是經論相扶、往生路通。無復疑惑也。

「閉」
②8 底 「使」 元 宝
②9 底 「開」 元 宝
③0 底 「含」 元 宝
「合」

第三明廣施問答釋去疑情者、自下就大智度論廣施問

因を隠して果を説かれたので名づけて別時意の語というのである。どうしてわかるのだろうか。もし十念が成就するならば、それはみな過去の因があるからである。『大般涅槃經』に次のように説かれてゐる。「過去においてすでに半恒河沙の諸仏に供養し菩提心を發したならば、惡世のなかにおいて大乘經教を聞いてただ誹謗（の心）を起こさないだけで、いまだその他の功德はない。もし一恒河沙の諸仏を供養し菩提心を發し、その後大乘經教を聞けば、ただ誹謗（の心）を起こさないだけでなく、また愛樂を加える⁴³」と。

さまざまな經典をもつて確かめると、十念成就するものはみな過去に「往生の」因が間違ひなくあるとはつきりわかる。もし過去に「往生の」因がないものは、善知識にすら出会うことができな⁴⁴い。ましてや十念によつて往生できるだろうか。『撰大乘論』に「一の金錢を元手に千の金錢を商売で得るのに一日では得られない」というのは、もし仏意によれば、衆生に対して多くの善因を積んで念仏によつて往生させようと願うからである。『撰大乘論』の著者の意図を思うに過去の因を隠しており、これはまた道理にもかなつてゐる。もしこのような理解をすれば、上は仏の經典に順じ、下は論書の意にかなう。つまり經典・論書が互いを補い合⁴⁵い往生への路が通じる。二度とこれを疑つてはいけない。

第三節に広く問答を設け、疑心をとりぞくことを明らかにする

答。問曰、但一切衆生從曠大劫來、備造有漏之業繫屬三界。云何不斷三界繫業、直爾少時念阿彌陀佛、即得往生便出三界者。此繫業之義復欲云何。

答曰、有二種解釋。一就法來破。二借喩以顯。言就法者、諸佛如來有不思議智、大乘廣智、無等無倫最上勝智。不思議智者力、能以少作多、以多作少、以近爲遠、以遠爲近、以輕爲重、以重爲輕。有如是等智、無量無邊不可思議。

自下第二有七番、竝借喩以顯。第一譬如百夫百年聚薪積高千仞、豆許火焚半日便盡。豈可得言百年之薪半日不盡也。

③① 〔底〕「非」 ①元 ①玉
なし

第二譬如癖者寄載他船、因風帆勢一日至於③①千里。豈可得言癖者云何一日至千里也。

というのは、これ以降は『大智度論』に基づき広く問答を設ける^{④⑤}。問う。すべての衆生ははるかな昔から今まで、ことごとく煩惱による悪業をつくつて三界に繋ぎ止められている。三界に繋ぎ止められる悪業を断つこともなく、少しの間阿彌陀仏を念するだけでただちに往生して三界を出ることができるといふならば、この悪業の意味をどのように理解したらよいのだろうか。

答える。二種の解釈がある。一つは教法に基づき「疑問を」破る。二つには比喻によって明らかにする。教法に基づくというのは、もろもろの仏には不思議智・大乘広智・無等無倫最上勝智がある。不思議智という力とは、少ないものを多くし、多いものを少なくし、近いものを遠くし、遠いものを近くし、軽いものを重くし、重いものを軽くする。これらの智慧があり無量無辺不可思議なのである。

これ以降は第二に七番があり、比喻によって明らかにする。第一にはたとえば百人の人が百年薪を集めて、その積みあげた高さが千仞になったとしても、豆ほどの火で焚けば、半日で燃え尽きるようなものである。どうして百年かけて集めた薪が半日で燃え尽きないといえるだろうか^{④⑥}。

第二にはたとえば足の不自由なものが他の船に乗れば、帆に風をうけた勢いにより一日に千里の彼方に達するようなものである^{④⑧}。どうしてそれができないといえるだろうか^{④⑨}。

③② 底 「頃」 ⑤⑤
「頃」

第三亦如下賤貧人獲一瑞物而以貢王、王慶所得加諸重賞、斯須之頃③②富貴盈望。豈可得言以數十年仕備盡辛勤、尚不達而歸者、言彼富貴無此事也。

③③ 底 ⑤⑤ 「以劣夫之力言」 ⑤⑤ 「言以劣夫之力」

第四猶如劣夫以己身力擲驢不上。若從輪王行便乘虛空飛騰自在。豈可得言以劣夫之力③③必不能昇虛空也。

第五又如十圍之索千夫不制。童子揮劍儻爾兩分。豈亦得言童子之力不能斷索也。

第六又如鳩鳥入水、魚蚌斃皆死、犀角觸泥、死者還活。豈可得言性命一斷不可生也。

③④ 底 「子安安安」 ⑤⑤
「子安」

第七亦如黃鵠喚子安子安③④還活。豈可得言墳下千齡決無可甦也。

第三にはまた身分が賤しい貧しい者が一つの宝物を手に入れ、王に献呈すれば、王は手に入れたことによるこんでさまざまな褒美を与えるので、少しの間に望み通りの富貴を得るようなものである。数十年も仕えてつらい勤めを尽しても、昇進せずに終わるものがあるからといって、どうしてこの「貧者が得た」富貴について、それはありえないといえようか。^{⑤⑤}

第四には非力な人が自分の力ではロバに鞭を打つても「空に」昇らないけれども、もし転輪聖王の行列に従うなら、空を自由に飛び回ることができるようなものである。どうして非力な人の力では決して空に昇ることができないといえるだろうか。^{⑤⑤}

第五にはまた十重にめぐらされた綱は千人の人でも切れないが、童子が剣を使えばたちまち二分できるようなものである。どうして童子の力で綱を断つことができないといえるだろうか。^{⑤⑤}

第六にはまた鳩鳥（という毒鳥）が水に入れば魚や貝がみな死んでしまうが、犀の角が泥に触れば死んだものも生きかえるようなものである。どうして生命が一度断たれたら、生きかえらないといえるだろうか。^{⑤⑤}

第七にはまた鶴が子安を呼ぶことで子安が生き返ったようなものである。どうして墓の下に千年いたものが蘇ることはないといえるだろうか。^{⑤⑤}

一切萬法皆有自力他力自攝他攝、千開萬閉無量無邊。汝豈得以有礙之識疑彼無礙之法乎。

又五不思議中、佛法最不可思議。汝以三界繫業爲重、疑彼少時念佛爲輕、不得往生安樂國入正定聚者、是事不然。

③⑤ 「稱」 ⑤⑥ 「秤」

問曰、大乘經云、業道如秤③⑤、重處先牽。云何衆生一形已來、或百年或十年、乃至今日無惡不造。云何臨終遇善知識、十念相續即得往生。若爾者、先牽之義何以取信。

③⑥ 「教」 ⑤⑥ 「按」 頭註②③に同じ。

答曰、汝謂一形惡業爲重、以下品人十念之善以爲輕者、今當以義按③⑥量。輕重之義者、正明在心在縁在決定、不在時節久近多少也。

云何在心。謂彼人造罪時、自依止虛妄顛倒心生。此十念者、依善知識方便安慰聞實相法生。一實一虛、豈得相比也。

すべてのものには自力・他力、自摂・他摂があり、その状態の変わりゆくさまは計り知れない。あなたはどのようにして煩惱にさまたげられた見識によって、このなにもにもさまたげられない法を疑うことができるだろうか。

また五つの不思議③⑤のなかで仏法が最も不可思議である。あなたは三界に繋ぎ止められる悪業を重くとらえ、あのような少しの間の念仏〔の功德〕を軽くとらえて、安樂國に往生して不退転を得ることができないと疑うのは間違いである。

問う。大乘經典に「業の道理は秤のようなもので、重い業から先に引かれていく」③⑥と説かれている。衆生は一生涯、あるいは百年あるいは十年、今日に至るまで、悪を造り続けているのに、どうして臨終に善知識に遇い十念相続するだけでただちに往生できるのか。もしそうならば、「先に引かれていく」という意味をどのように信じたらよいのだろうか。

答える。あなたは一生涯に造る悪業が重く、下品の人の十念の善業を軽く考えているが、よくその意味を鑑み、比べなければならぬ。軽重の意味はまさしく心にあり、縁にあり、決定にあつて、時間の長短・多少にはかかわらないことで明らかにされる。

「心にあり」とはどういう意味であろうか。人が罪を造る時、自らの虚妄顛倒の心によって〔悪業は〕生じる。〔しかし〕この十念は善知識の手ほどきや慰めにより実相の法を聞かせることで生

③⑦底 「巨」 ⑤⑩

何者、譬如千歳暗室光若暫至即便明朗。豈得言在室千歳而不去也。是故遺日摩尼寶經云、佛告迦葉菩薩。衆生雖復數千巨③⑦億萬劫在愛欲中爲罪所覆、若聞佛經一反念善、罪即消盡也。是名在心。

二、云何在縁者、謂彼人造罪時、自依止妄想心、依煩惱果報衆生。今此十念者、依止無上信心、依阿彌陀如來真實清淨無量功德名號生。譬如有人被毒箭所中徹筋破骨、若聞滅除藥鼓聲、即箭出毒除。豈可得言彼箭深毒厲。聞鼓音聲不能拔箭去毒也。是名在縁。

③⑧底 「有」 ⑤⑩

三、云何在決定者、彼人造罪時、自依止有後③⑧心有間心生。今此十念者、依止無後③⑨心無間心起。是爲

じる。一方は実でもう一方は虚であり、どうして比べることができようか。

なぜならば、たとえば千年の間、闇に閉ざされた部屋であったとしても、光が少しでも入れば、「室内が」明るくなるようなものである。どうして「闇が」千年間部屋にあったからといって、それが去らないといえるだろう。このために『遺日摩尼宝經』に次のように説かれる。「仏は迦葉菩薩に告げられた。衆生が数千巨億万劫の間、愛欲のなかにあって、罪にまみれているといつても、もし仏の教えを聞いてひとたび〔心に〕善を念ずれば、罪はたちまち消えさる」と。これを「心にあり」と名づける。

二つに「縁にあり」とはどういう意味であろうか。人が罪を造る時には、自らの妄想の心と煩惱の報いの結果としての衆生〔との縁〕によって生じる。「しかし」いまこの十念は、この上ない信心と阿彌陀如來の眞實清淨で無量の功德をそなえた名号〔との縁〕によって生じる。たとえば人に毒矢がささり、筋を切られ骨を砕かれても、もし滅除藥の鼓の音を聞けば、すぐに矢が抜け毒が除かれるようなものである。どうして矢が深くささり、毒がはげしくても鼓の音を聞いて、矢が抜け毒が除去されないといえるだろうか。これを「縁にあり」と名づける。

三つには「決定にあり」とはどういう意味であろうか。人が罪を造る時、自らの有後心・有間心（後があるという心・雑念が混じ

③⑨底「有有」④元
⑤「後」

決定。

又智度論云、一切衆生臨終之時、刀風解形、死苦來逼、生大怖畏。是故遇善知識發大勇猛、心心相續十念、即是増上善根便得往生。又如有人对敵破陣、一形之力一時盡用。其十念之善亦如是也。又若人臨終時生一念邪見、増上惡心、即能傾三界之福、即入惡道也。問曰。既云垂終十念之善能傾一生惡業得生淨土者、未知幾時爲十念也。

問曰、既云垂終十念之善能傾一生惡業得生淨土者、未知幾時爲十念也。

答曰、如經說云、百一生滅成一刹那、六十刹那以爲一念。此依經論汎解念也。今時解念、不取此時節。但憶念阿彌陀佛、若總相若別相。隨所緣觀、逕於十念、無他念想間雜。是名十念。

又云、十念相續者、是聖者一數之名耳。但能積念凝

った心) によつて「その罪は」生じる。「しかし」いまこの十念は無後心・無間心(後がないという心・純粹な心)によつて起る。これを「決定にあり」^{⑤⑨}とする。

また『大智度論』に次のように説かれる。「一切の衆生は臨終の時、刀のような風によつて体を切られ、死苦が押し寄せてきて大変な恐怖の心が生じる。このために善知識に遇つて大いに勇猛な心を發して、その心を相續して十念すれば、善根が積まれてすぐに往生できる」^{⑥⑩}と。また「ある人が敵に対して陣を破るのに、一生涯の力を一瞬ですべて使うようなものである。十念の善もまたこれと同じようなものである」^{⑥⑪}と。また「もしある人が臨終の時、一念の邪見が生じたなら、悪心が強まり三界で積んだ福を失い、惡道におちる」^{⑥⑫}と。

問う。臨終のときに十念の善が一生の惡業をくつがえして淨土に生じることができるといふが、どれほどの時間を十念とするのか。答える。經典に説かれるところでは、百一の生滅を一刹那とし、六十の刹那で一念とする。これは經論による一般的な念の理解である。^{⑥⑬}「しかしながら」いまここで念を理解する場合、この時間〔の理解〕をとらない。ただ阿彌陀仏の全体、あるいは一部を憶念する。このように縁に随つて觀じ、十念が経つ間、他の念想が混ざることがない。これを十念と名づける。

また十念相續とは、聖者の示す一つの数の名にすぎない。念を積

思不縁他事、使業道成辨、便甬。亦未勞記之頭數也。又云。若久行人念多應依此、若始行人念者記數亦好。此亦依聖教。

④〇底 「似何」 元

④一 「何似」

又問曰、今欲勸行念佛三昧、未知計念相狀何似④〇。

答曰、譬如有人於空曠迴處、值遇怨賊拔刀奮勇直來欲取。此人徑走規渡一河。未及到河、即作此念、我至河岸。爲脱衣渡、爲着衣浮。若脱衣渡、唯恐無暇。若着衣、復畏首領④一難全。爾時但有一心作渡河方便、無餘心想間雜。行者亦爾。念阿彌陀佛時、亦如彼人念渡念念相次、無餘心想間雜、或念佛法身、或念佛神力、或念佛智恵、或念佛毫④二相、或念佛相好、或念佛本願。稱名亦爾。但能專至相續不斷、定生佛前。

④二底 ④三 「豪」 元
「毫」

み、思いを凝らして他の事に関わらず、仏道修行を成就すれば、念仏の数をとる必要はなく、わざわざ念仏の数を記さない。また長年修行している人の念仏の多くはこのようなものであるが、修行を始めたばかりの人の念仏ならば数を記してもよい。これもまた聖教による。

また問う。いま念仏三昧を勧めようと思うのだが、その念仏のあり様はどのようなものであるか。

答える。たとえばなにもない広野において、怨賊が刀を抜いて勇ましく迫り来て、命を奪い取ろうとするのに出会ったとする。この人はすぐに走り、河を渡ろうとした。河につく前にこのように思った。「私は河の岸についたならば、衣を脱いで渡ろうか、それとも衣を着て浮かぼうか。もし衣を脱いで渡るなら、その時間がないであろう。もし衣を着たまま浮かべば、命が助からないだろう」と。その時はただ一心に河を渡る方法を考えて、その他のことを考えないようなものである。「念仏の」行者もまた同様である。阿彌陀仏を念ずる時も、河を渡ることだけを考え続けている人のように、他の思いが間に入らず、仏の法身を念じ、あるいは仏の神力を念じ、あるいは仏の智慧を念じ、あるいは仏の毫相を念じ、あるいは仏の相好を念じ、あるいは仏の本願を念ずる。「仏の」名を称することも同様である。専ら相續して途絶えなければ、必ず仏前に往生する。

今勸後代學者。若欲會其二諦、但知念念不可得、即是智惠門、而能繫念相續不斷、即是功德門。是故經云、菩薩摩訶薩恒以功德智惠以脩其心。若始學者未能破相。但能依相專至、無不往生。不須疑也。

又問曰、無量壽大經云。十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。今有世人、聞此聖教、現在一形全不作意、擬臨終時方欲脩念、是事云何。

答曰、此事不類。何者、經云、十念相續、似若不難。然諸凡夫心如野馬、識劇猿猴、馳騁六塵、何曾停息。各須宜發^{④③}信心、預自剋念、使積習成性善根堅固也。

「發」^{④③}「及」^{④④}「元」^{④⑤}

いま後代の學者に勧める。もし真俗二諦を矛盾なく解釈しようとするならば、「真諦とは」念々に相をとらえることができないのが智慧門であり、「俗諦とは」念をかけて相續して途絶えさせないのが功德門であると知らなければならない。このために『維摩詰所説經』に次のように説かれる。「菩薩はつねに功德と智慧をもつてその心を修養する^{⑥⑥}」と。初学者ならばまだ相を離れることができない。相にしたがい専ら「称名」すれば必ず往生する。疑つてはいけない。

また問う。『無量壽經』に次のように説かれる。「十方の衆生が心から信じ願ひ、私の国に往生したいと十念し、それでも往生しないのなら私は悟りを得ません^{⑥⑦}」と。いま世の中の人がこの聖教を聞いて、現在の一生涯において全く心に念ずることなく、臨終の時になつてはじめて念仏しようとした場合、この事はどうだろうか。

答える。この事は意味を取り違えている。なぜならば、經典に次のように説かれる^{⑥⑧}。「十念相續と説かれるのは難しくはないようである。そうではあるけれども、諸の凡夫の心は野生の馬のようであり、その六識は猿よりも激しく六境をかけまわり、これまで止められたためしが無い。「だから」各々が信心を發して、平素から自らしっかりと仏に念をかけて、習慣によつてその人の性質となし、善根を堅固におかなければならない。

如佛告大王。人積善行、死無惡念。如樹先傾、倒必隨曲也。若刀風一至、百苦湊身。若習先不在、懷念何可辨。各宜同志五三預結言要、臨命終時迭相開曉、爲稱彌陀名號、願生安樂、聲聲相次使成十念也。譬如蠟印印泥、印壞文成、此命斷時即是生安樂國時。一入正定聚、更何所憂。若宜量此利大、何不預剋念也。

又問、諸大乘經論皆言、一切衆生畢竟無生、猶若虛空。云何天親龍樹菩薩願往生也。

答曰、言衆生畢竟無生如虛空者、有二種義。一者如凡夫人所見、實衆生實生死等。若據菩薩往生^{④④}、畢竟如虛空如兔角。二者今言生者、是因緣生。因緣生故、即是假名生、假名生故、即是無生。不違大道理也。非如凡夫謂有實衆生實生死也。

④④底 「望」 ④⑤
「生」

仏が大王に「善行を積めば、死ぬときに悪念がおこらない。樹が傾いて倒れるときには、かならず曲がつている方に倒れるようなものである^{⑥⑥}」と告げられたとおりである。もし刀のような風が一度吹けば、多くの苦しみが身におよぶ。もし習慣がついていなければ、「臨終になつて」どうして念仏できようか。おのおの同志のものが三人でも五人でも前もつて約束して、命終の時にお互いにさとし合ひ、阿弥陀仏の名号を称えて極樂に往生しようと願ひ、声を途絶えさせることなく十念させなさい。たとえば蠟でつくつた印を泥におし、印が壊れて文字ができあがるように、この命が終わるときがまさに極樂に往生するときである。一度不退転を得れば、さらになにを憂うことがあろう」と。この利益の大きさがわかれば、どうして平素からしつかりと仏に念をかけておかないということがあろうか。

また問う。さまざまな大乘經論のことごとくに、「一切の衆生はつまるところ無生無滅にして虚空のようなものである」と説かれて^{⑦⑦}いる。どうして天親菩薩や龍樹菩薩は往生を願うのか。

答える。「衆生はつまるところ無生無滅にして虚空のようなものである」というのは、二種の意味がある。一つには、凡夫の認識は、実の衆生、実の生死があるということである。菩薩（天親・龍樹）の認識によれば、往生とはつまるところ虚空のようなもので兎の角のようなものということになる。二つにはいま「生」というのはつまり因縁による生である。因縁による生であるから仮

④⑤ 「無」 ④⑥ 「元」

又問曰、夫生爲有本、乃是衆累之元④⑤。若知此過捨生求無生者、可有脱期。今既勸生淨土、即是棄生求生。生何可盡。

答曰、然彼淨土乃是阿彌陀如來清淨本願無生之生。非如三有衆生愛染虚妄執着生也。何以故、夫法性清淨畢竟無生。而言生者。得生者之情耳。

又問曰、如上所言、知生無生、當上品生者。若爾下品生人乘十念往生者、豈非取實生也。若實生者、即墮二疑。一恐不得往生。二謂此相善不能與無生爲因也。

答曰、釋有三番。一譬如淨磨尼珠置之濁水、以珠威力水即澄清。若人雖有無量生死罪濁、若聞阿彌陀如

名の生であり、假名の生であるから無生無滅である。これは大いなる道理に相違しない。凡夫の實の衆生、實の生死があると認識するようなことではない。

また問う。そもそも生は迷いの世界の根本であり、つまりこれは諸々のわざわいの根元である。もしこの罪過に気づき「實の」生を捨てて無生を求めれば、解脱するときもあるはずである。いま淨土に往生することを勧めるのは、生をすてて「淨土の」生を求めることになる。はたしてそれで生が尽きることがあろうか。

答える。この淨土は阿彌陀如來の清淨なる本願による無生の生である。三界にいる衆生の愛着や虚妄の執着による生とは異なる。なぜかといえば、法性は清淨であり究極的には無生であるからである。だから生というのは往生を得たものの心情「を表現した言葉」にすぎないのである。

また問う^{④⑥}。今まで述べたように、生は無生であると認識するのは、上品生である。もしそうであるならば下品生の人が十念によって往生するのは、實の生として認識することにならないのか。もし實の生として認識するならば、二つの疑義が生まれる。一つには往生できないということをおそれる。二つにはこの有相の善は無生「の生」の因とはならないということである。

答える。解釈に三つある。一つにはたとえば淨磨尼珠を濁った水に置けば、珠の威力によって水が澄みわたるようなものである。

來至極無生清淨寶珠名號。投之濁心、念念之中罪滅心淨即便往生。

二如淨磨尼珠、以玄黃帛裹投之於水、水即玄黃、一如物色。彼清淨佛土有阿彌陀如來無上寶珠名號。以無量功德成就帛裹、投之於所往生者心水之中、豈不能轉生爲無生智乎。

④⑥底⑤「水」⑤

「水」

④⑦底「水」⑤⑤

「水」

以下一箇所も同

様である。

又問曰、依何身故説往生也。

答曰、於此間假名人中修諸行門、前念與後念作因。

穢土假名人、淨土假名人、不得決定一、不得決定異。前後心亦如是。何以故、若決定一、則無因果、若決定異、則非相續。以是義故、横豎④⑧雖別、始終是一

たとえ限りなく輪廻をせざるを得ない罪があるとしても、阿彌陀如來のこの上ない無生清淨の宝珠のような名号を聞いて、これを濁った心に投じれば、念々のうちに罪が滅して心が清淨になりたちまち往生する。

二つには淨磨尼珠を黒や黄の布につつんで水に入れたら、水はそれぞれ黒や黄と同じ色になるようなものである。あの清淨である仏土には阿彌陀如來のこの上ない宝珠のような名号がある。「それを」無量の功德を成就した布でつつんで、これを往生する人の心のうちに入れたなら、どうして生を転じて無生の智とすることができないであろうか。

三つには水の上で炎が燃え、盛んであれば氷はとけ、氷がとければ火が消えるようなものである。下品往生の人は法性が無生である」と知らないけれども、仏名を称する力によって往生の心をおこし、淨土に往生しようと願えば、無生の世界に入った時に見生の火は自然に消える。

また問う。どのような身によって往生をするというのか。

答える。この世界の仮名の人のなかにおいて、さまざまな修行をすれば、前念は後念のために因となる。穢土の仮名人と淨土の仮名人とはまったく同一ではないが、まったく異なるわけでもない。前心と後心もこれと同様である。なぜかといえ、もしまったく

「豎」

行者也。

又問曰、若人但能稱佛名号能除諸障者。若爾、譬如有人以指指月。此指應能破闇也。

答曰、諸法万差、不可一概。何者、自有名即法、自有名異法。有名即法者、如諸佛菩薩名号、禁呪音辭、修多羅章句等是也。如禁呪辭曰、日出東方乍赤乍黃、假令西亥行禁、患者亦愈。又如有人被狗^{④⑨}所嚙、灸虎骨尉之、患者即愈。或時無骨、好楸掌磨之、口中喚言虎虎來來、患者亦愈。或復有人患脚轉筋、灸木瓜^{⑤⑩}枝^{⑤⑪}尉之、患者即愈。或無木瓜炙手磨之、口喚木瓜、患者亦愈。吾身得其効也。何以故、不那以名即法故。有名異法者、如以指指月是也。

「枝」

④⑧ 底 未詳 ④⑨ ⑤⑩ ⑤⑪

又問曰、若人但稱念彌陀佛名號、能除十方衆生無明

同一ならば因果關係が成立せず、もしまったく異なるならば相續とならない。このような意味から横・豎（穢土・浄土）は別であるといつても、始・終（前念、後念）は同一の行者である。^②

また問う。もし仏の名号を称えて様々な障りを除くならば、たとえば指で月をさすようなものである。この指は闇を破るのであるうか。

答える。あらゆる現象はすべて違っていて一概にはいえない。なぜならば名が法に即することもあれば、名が法に異なることもある。名が法に即することとは、諸仏・菩薩の名号、禁呪の音辭、經典の章句等のようなものである。禁呪の辭に、「日出東方乍赤乍黃」というが、たとえ西亥（午後五時から十一時）にこの禁呪を唱えても、患いが癒えるようなものである。また狗に嚙まれたら、虎の骨を炙って患部にあてればすぐに癒える。骨のないときには、掌をひろげてこすり、口のなかで「虎来虎来」と唱えれば癒えるようなものである。あるいはまたふくらはぎが痙攣すれば、木瓜の枝を炙って患部にあてればすぐに癒える。木瓜がなければ、手を炙ってこすり、口に「木瓜木瓜」と唱えれば癒える。私は身をもってその効果を経験したことがある。なぜこのようになるのかといえは名が法に即するからである。名が法に異なることとは、指で月をさす〔こと闇を破ることがない〕ようなものである。^②

また問う。もし弥陀の名号を称念しただけで、あらゆる衆生の無

黒暗得往生者、然有衆生、稱名憶念、而無明猶在、不滿所願者何意。

答曰、由不如實修行、與名義不相應故也。所以者何。謂不知如來是實相身是爲物身。復有三種不相應。一者信心不淳。若存若亡故。二者信心不一。謂無決定故。三者信心不相續、謂餘念間故。迭相收攝。若相續則是一心。但能一心即是淳。具此三心若不生者、無有是處。

明の黒闇を取り除き往生できるといふならば、どうして衆生が名を称し憶念するのに、無明がまだあり、願いは満たされないのだろうか。

答える。如実に修行をせず、名義と相応しないためである。それはなぜか。如來は実相身であり爲物身である、と知らないからである。⁽⁷⁴⁾また三種の相応しないことがあるからで、一つには信心が篤くない。あるときとないときがあるからである。二つには信心が一ではない。定まっていないからである。三つには信心が相続しない。他の思いが混じるからである。これらが相互に関わり合っている。「つまり」相続すればこれが一心となる。一心であれば、これが淳心となる。この三心を具えて往生しないという道理はない。⁽⁷⁵⁾

註

- (1) 『無量壽經』三輩段の意を『論註』の文によって示されている。『論註』と考えられる理由は以下の二点。(一) 次の引用が『論註』であること、(二) 『大經』の文と見れば三輩段であるが、次の『論註』巻下の文の方が引文に整合する。
- 「案王舍城所説無量壽經、三輩生中雖行有優劣。莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心、即是願作佛心。願作佛心、即是度衆生心。度衆生心、即攝取衆生、生有佛國土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也」(『大正藏』第四〇卷、八四二上)
- (2) 『安樂集私記』(『淨全』一卷七二五下)によって「要須」を全体にかかるとように訳出した。
- (3) 『往生論註』巻下……「此無上菩提心、即是願作佛心。願作佛心、即是度衆生心。度衆生心、即攝取衆生、生有佛國土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也」(『大正藏』第四〇卷、五四二上)
- (4) 『諸法無行經』巻上(鳩摩羅什訳)……「若人求菩提 則無有菩提 是人遠菩提 譬如天與地」(『大正藏』第一五卷、七五一中)
- (5) 『維摩詰所説經』巻上(鳩摩羅什訳)……「菩提者。不可以身得。不可以心得」(『大正藏』第一四卷、五四二中)
- (6) 『大智度論』とあるが以下のように字句の前後から『略論安樂淨土義』の孫引きと考えられる。
- 『大智度論』卷第一八……「若不見般若 是則爲被縛 若人見般若 是則爲被縛 若人見般若 是亦名解脫 若不見般若 是則得解脫」(『大正藏』第二五卷、一九〇下)
- 『略論安樂淨土義』……「若人見般若。是則爲被縛。若不見般若。是亦爲被縛。若人見般若。是則爲解脫。若不見般若。是亦得解脫」(『大正藏』第四七卷、二二下)
- (7) 『大智度論』にはない。
- 『略論』……「此偈中説。不離四句者爲縛。離四句者爲解脫」(『大正藏』第四七卷、二下)
- (8) 「無染清淨心」と「樂清淨心」の説明では菩提門となっているため統一して訳した。
- (9) 『往生論註』巻下……「障菩提門者、菩薩如是善知迴向成就、即能遠離三種菩提門相違法何等三種。一者、依智慧門不求自樂、遠離我心貪著自身故。知進守退曰智、知空無我曰慧。依智故不求自樂。依慧故遠離我心貪著自身。二者、依慈悲門、拔一切衆生苦、遠離無安衆生心故。拔苦曰慈、與樂曰悲。依慈故、拔一切衆生苦、依悲故、遠離無安衆生心。三者、依方便門、憐愍一切衆生心遠離供養恭敬自身心故。正直曰方、外己曰便。依正直故、生憐愍一切衆生心。依外己故、遠離供養恭敬自身心。是名遠離三種菩提門相違法。願菩提門者、菩薩遠離如是三種菩提門相違法、得三種隨順菩提門法滿足故。何等三種。一者、無染清淨心、以不爲自身求諸樂故。菩提は無染清淨處。若爲身求樂、即違菩提。是故無染清淨心、是願菩提門。二者、安清淨心以拔一切衆生苦故 菩提是安穩一切衆生清淨處。若不作心、拔一切衆生、離生死苦、即便違菩提。是故拔一切衆生苦、是願菩提門。三者樂清淨心。以令一切衆生得大菩提故、以攝取衆生彼國土故。菩提是畢竟常樂處。若不令一切衆生、得畢竟常樂、則違菩提。此畢竟常樂、依何而得。依大乘門。大乘門者、謂彼安樂佛國土是也。是故又言以攝取衆生彼國土故」(『大正藏』第四〇卷、八四二中)
- (10) 『大般涅槃經』卷三三、迦葉菩薩品第十二之一(曇無讖訳)……「於一名法、說無量名。於一義中、說無量名。於無量義、說無量名」(『大正藏』第二二卷、五六三下)
- (11) 『大般涅槃經』卷八、如來性品(曇無讖訳)……「佛言、譬如二人共爲親友。一是王子。一是貧賤。如是二人互相往返。是時貧人見是王子、有一好刀淨妙第一心中貪著。王子後時捉持是刀逃至他國。於是貧人後、於他家寄臥止宿、即於眠中調語刀刀。傍人聞之、收至王所」(『大正藏』第二二卷、四二二中)
- (12) 『長阿含經』卷一九、第四分、世記經。龍鳥品(佛陀耶舍・竺佛念訳)……「爾時世尊、告諸比丘言、乃往過去、有王名鏡面。時集生盲

人、聚在一處。而告之曰、汝等生盲。寧識象不。對曰、大王、我不識不知。王復告言、汝等欲知彼形類不。對曰、欲知。時王即勅侍者、使將象來。令衆盲人手自捫象。中有摸象得鼻者。王言此是象、或有摸象得其牙者。或有摸象得其耳者。或有摸象得其頭者。或有摸象得其背者。或有摸象得其腹者。或有摸象得其脛者。或有摸象得其膊者。或有摸象得其迹者。或有摸象得其尾者。王皆語言、此是象也。時鏡面王、即却彼象、問盲子言、象何等類。其諸盲子、得象鼻者、言象如曲轆。得象牙者、言象如杵。得象耳者、言象如箕。得象頭者、言象如曲轆。得象背者、言象如丘阜。得象腹者、言象如壁。得象脛者、言象如樹。得象膊者、言象如柱。得象跡者、言象如臼。得象尾者言象如縷。各各共諍互相是非。此言如是。彼言不爾。云云不已遂至鬪諍。時王見此、歡喜大笑。爾時鏡面王即說頌曰、諸盲人聚集於此競諍訟象身本一體 異相生是非」(『大正藏』第一卷、一二八下—一二九上)

(13) この一文は不要に思われるが今は底本を尊重し訳出した。『安樂集私記』(『淨全』一卷、七二六下)にはこの文章について参雑ありとの指摘がある。

(14) 『無上依經』卷上(眞諦訳)……「阿難。若有人、執我見、如須彌山大我不驚怪、亦不毀些。増上慢人執著空見。如一毛髮、作十六分我不許可」(『大正藏』第一六卷、四七一中)

(15) 『維摩詰所說經』卷中、佛道品(鳩摩羅什訳)……「雖知諸佛國及與衆生空 而常修淨土 教化於群生」(『大正藏』第一四卷、五五〇上)

(16) 『維摩詰所說經』卷中、文殊師利問疾品(鳩摩羅什訳)……「雖行無作而現受身。是菩薩行。雖行無起而起一切善行。是菩薩行」(『大正藏』第一四卷五四五下)

なおこの前後にもさまざまな菩薩行が説かれるが、この二句のみが引用される意図は未詳。

(17) 『大方等陀羅尼經』護戒分卷第四(法衆訳)……「復次善男子、復有五事。不得與畜猪羊雞狗家往來。不得與星曆家往來。不得與姪女家

往來。不得與寡婦家往來。不得與沽酒家往來。如是五事是行者、業護戒境界。善男子如是七科五事。行者應深了觀根原。然後捨離其餘諸事亦復如是。復次善男子、行有二種。一者出世人行。二者在世人行。出世人者、不禁如上諸事。在世行者吾以禁之。何以故。譬如嬰兒、始能行時、其母護持、不聽遠行。假使遠者、或絕乳而死。或墮水火故死。或爲虎狼師子之所食噉。或爲鷄鵲鴉所傷。如是嬰兒、母常護持、令不暴害。然後長大若有所作必能成辦。善男子、我亦如是爲一切母。一切衆生、即是我子。常爲護助、令不遭橫。速出三界、能有所辦」(『大正藏』第二一卷、六五七下)

(18) 『維摩詰所說經』卷中、文殊師利問疾品(鳩摩羅什訳)……「彼有疾菩薩……(中略)……於諸衆生若起愛見大悲、即應捨離」(『大正藏』第一四卷、五四五上)

(19) 『維摩詰所說經』卷上佛國品(鳩摩羅什訳)……「譬如有人、欲於空地、造立宮室、隨意無礙。若於虛空、終不能成。菩薩如是。爲成就衆生故、願取佛國。願取佛國者、非於空也」(『大正藏』第一四卷、五三八上)

(20) 『無字寶篋經』(菩提流支訳)……「善男子、若善男子善女人、復有一法、是佛所覺。善男子、所謂諸法、不去不來、無因無緣、無生無滅、無思無慮、無增無減。善男子、若法畢竟、自性法性、非是自性。若法譬喻、所不可說。若以名字、亦不可說。此是一法、如來所覺。說此廣嚴上王無字寶篋光嚴法門時、乃至得住十地菩薩、有微塵數眼不觀者。如是等衆、皆得阿耨多羅三藐三菩提心。如是等衆生證阿羅漢果。復過此數衆生、捨地獄苦生於天中。無量諸菩薩現百千萬諸三昧門。何況多說而無利益。爾時佛告羅睺羅言、汝能受持、我此所說、正法義不。說此語時、以佛神力、恒河沙等諸世界中、九億菩薩。從坐而起。即白佛言。世尊。我等皆能持此法門。令於此間娑婆世界、未來世中、爲諸衆生、流通不絕。知是菩薩是智者、爾時四大神王白佛言、世尊、我等亦能受持如來所說法義。令彼菩薩所求滿足。若於是中是智者、爾時世尊、周遍觀察一切衆已。作如是言、善男子、我非惟修微妙善根而成

- 正覺。彼諸衆生、若有能聞此正法者。彼亦非修微少善根。若能受持此廣博嚴上王無字寶篋法門、若能聞者、彼人則爲已恭敬我尊重讚嘆。善男子、是善男子善女人、則爲兩肩荷擔菩提。彼人則得不斷辯才、得善清淨諸佛世界。命終之時、則得現見阿彌陀佛、聲聞菩薩、大衆圍繞、住其人前」(『大正藏』第一七卷、八七二上—中)
- (21) 『大智度論』卷第二九(鳩摩羅什訳)……「若菩薩初生菩薩家者、如嬰兒。得無生法忍、乃至十住地、離諸惡事。名爲鳩摩羅伽地、欲得如是地、當學般若波羅蜜。常欲不離諸佛、菩薩世所生、常值諸佛」(『大正藏』第二五卷、二七五中—下)
- 『同』卷第六七(鳩摩羅什訳)……「是菩薩一心信解供養、般若波羅蜜亦如是。愛念諸佛故。常行念佛三昧故、終不離諸佛。乃至到阿鞞跋致地。教化衆生、離諸佛無咎。如小兒、不離其母。恐墮諸難故、常深愛念善法故、乃至阿耨多羅三藐三菩提、終不離六波羅蜜等。得如是等、今世、後世大果報者。(『大正藏』第二五卷、五三〇中)
- (22) 大正藏では原文は「傳」との指摘があるが、他の箇所と見比べてこの原文は「傳」である。しかしながら文意より「傳」で校定した。
- (23) 『大智度論』卷第六一(鳩摩羅什訳)……「新發意菩薩。先教取相隨喜。漸得方便力。爾乃能行無相隨喜。譬如鳥子羽翼未成不可逼令高翔六翻成就、則能遠飛」(『大正藏』第二五卷、四八九下)
- (24) 『大智度論』六六卷(鳩摩羅什訳)……「是故此中說世尊不應於新發意菩薩前說是般若波羅蜜。新學菩薩聞是深智慧則心沒。應當在阿鞞跋致菩薩前說。阿鞞跋致智慧深故信而不沒」(『大正藏』第二五卷、五四四下)
- (25) 『安樂集』訳注(一)第一大門(10)を参照。
- (26) 良忠『安樂集私記』(『浄全』一卷、七二八下)には「不退ノ人」という。
- (27) 『大智度論』卷第二九(鳩摩羅什訳)……「有菩薩、未入菩薩位。未得阿鞞跋致受記別故。若遠離諸佛。便壞諸善根沒在煩惱」(『大正藏』第二五卷、二七五下)
- (28) 『大智度論』卷第二九(鳩摩羅什訳)……「又如少湯投大水池、雖消少處反更成冰。菩薩未入法位。若遠離諸佛、以少功德、無方便力。欲化衆生、雖少利益、反更墜落」(『大正藏』第二五卷、二七五下)
- (29) 習禪篇の智滿と護法篇の曇選が道綽の教えに共感していなかったことは、『続高僧伝』が伝えている。とくに『続高僧伝』卷二四の曇選伝には、武徳八年(六二五)に臨終を迎える曇選と道綽の会話として、「吾命將尽、何処生乎。名行僧道綽曰、阿闍黎、西方樂土、名爲安養、可願生彼。選曰、咄、爲身求樂、吾非爾儔。綽曰、若爾可無生耶。答曰、須見我者而爲生乎」(『大正藏』第五〇卷、六四一下)とある。破異見邪執の第五問答は、この曇選とのやりとりを受けて設定された可能性がある。
- (30) 『無量壽經』卷下(康僧鎧訳)……「去來進止、情無所係」(『大正藏』第一二卷、二七三下)
- (31) 『無量壽經』卷上、第十願(康僧鎧訳)……「設我得佛、國中天人、若起想念、貪計身者、不取正覺」(『大正藏』第一二卷、二六八上)
- (32) 『無量壽經』卷下(康僧鎧訳)……「隨意自在、無所適莫」(『大正藏』第一二卷、二七三下)
- (33) 『大正藏』第四七卷、九頁の註一三によれば、①「非」の上に「豈」がある説、②次の文から「非」は「便」の誤字である説、③「非」は衍字という説、④「非」は句末につける説、⑤「非」は言の誤字である説がある。ここでは①の説を採用した。
- (34) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』卷二、譬喻品第三(鳩摩羅什訳)「三界無安 猶如火宅」(『大正藏』第九卷、一四下)
- (35) 『無量壽經』卷上(康僧鎧訳)……「佛告阿難、世間帝王、有百千音樂。自轉輪聖王、乃至第六天上、伎樂音聲。展轉相勝、千億萬倍。第六天上、萬種樂音。不如無量壽國、諸七寶樹、一種音聲。千億倍也。亦有自然萬種伎樂。又其樂聲、無非法音。清暢哀亮、微妙和雅。十方世界音聲之中、最爲第一」(『大正藏』第一二卷、二七一上)
- (36) 『讀阿彌陀仏偈』

從世帝王至六天 音樂轉妙有八重 展轉勝前億萬倍 寶樹音麗倍亦然
復有自然妙伎樂 法音清和悅心神 哀婉雅亮超十方 故我稽首清淨樂
〔『大正藏』第四七卷、四二三中〕

(37) 『佛說灌頂隨願往生十方淨土經』(帛戶梨蜜多羅譯)……「普廣菩薩摩訶薩、又白佛言、世尊十方佛刹淨妙國土、有差別不。佛言普廣、無差別也。普廣又白佛言、世尊何故經中、讚歎阿彌陀刹、七寶諸樹宮殿樓閣、諸願生者、皆悉隨彼心中所欲應念而至。佛告普廣菩薩摩訶薩、汝不解我意。娑婆世界人多貪濁。信向者少、習邪者多。不信正法、不能專一。心亂無志、實無差別。令諸衆生專心有在。是故讚歎彼國土耳。諸往生者悉隨彼願、無不獲果」〔『大正藏』第二一卷、五二九下〕

(38) 『大方廣佛華嚴經』卷第二九、壽命品(佛跋陀羅譯)……「如此娑婆世界釋迦牟尼佛刹一劫、於安樂世界阿彌陀佛刹、爲一日一夜。安樂世界一劫、於聖服幢世界金剛佛刹、爲一日一夜。聖服幢世界一劫、於不退轉音聲輪世界善樂光明清淨開敷佛刹、爲一日一夜。不退轉音聲輪世界一劫、於離垢世界法幢佛刹、爲一日一夜。離垢世界一劫、於善燈世界師子佛刹、爲一日一夜。善燈世界一劫、於善光明世界盧舍那藏佛刹爲一日一夜。善光明世界一劫、於超出世界法光明清淨開敷蓮華佛刹爲一日一夜。超出世界一劫、於莊嚴慧世界一切明光明佛刹、爲一日一夜。莊嚴慧世界一劫、於鏡光明世界覺月佛刹、爲一日一夜。佛子、如是次第、乃至百萬阿僧祇世界。最後世界一劫、於勝蓮華世界賢首佛刹、爲一日一夜。普賢菩薩、等諸大菩薩充滿其中」〔『大正藏』第九卷、五八九下〕

(39) 『正法念處經』卷第六八(瞿曇般若流支譯)……「從此以西、乃有大海。多饒種種惡魚惡獸、甚可怖畏。(中略)其國有蛇、身長十里。飛空而行、無所障礙」〔『大正藏』第一七卷、四〇三中〕

(40) 『觀無量壽經』(璽良耶舍譯)……「下品下生者、或有衆生、作不善業五逆十惡、具諸不善。如此愚人、以惡業故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮。如此愚人、臨命終時、遇善知識、種種安慰、爲說妙法、教令念佛。彼人苦逼、不遑念佛。善友告言、汝若不能。念彼佛者、應稱

歸命無量壽佛。如是至心、令聲不絕、具足十念、稱南無阿彌陀佛。稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪。命終之時、見金蓮花猶如日輪住其人前。如一念頃、即得往生極樂世界」〔『大正藏』第一二卷、三四六上〕

(41) 『撰大乘論積』卷第六(世親造 眞諦譯)……「論曰、二別時意。釋曰、若有衆生、由懶惰障。不樂勤修行。如來以方便說、由此道理、於如來正法中、能勤修行方便說者。論曰、譬如有說。若人誦持多寶佛名、決定於無上菩提不更退墮。釋曰、是懶惰善根。以誦持多寶佛名、爲進上品功德。佛意爲顯上品功德、於淺行中、欲令捨懶惰勤修道、不由唯誦佛名。即不退墮、決定得無上菩提。譬如由一金錢營覓、得千金錢。非一日得千。由別時得千。如來意亦爾。此一金錢爲千金錢因。誦持佛名亦爾。爲不退墮菩提因。論曰、復有說、由唯發願、於安樂佛土、得往彼受生。釋曰、如前應知、是名別時意」〔『大正藏』第三一卷、一九四上—中〕

(42) 『撰大乘論積』卷第六……「譬如由一金錢營覓得千金錢。非一日得千」〔『大正藏』第三一卷、一九四中〕

(43) 『大般涅槃經』卷第六(曇無讖譯)……「善男子、若有衆生、於熙連河沙等諸佛所、發菩提心、乃能於是惡世、受持如是經典、不生誹謗。善男子、若有能於一恒河沙等諸佛世尊、發菩提心。然後乃能於惡世中、不謗是法、愛樂是典」〔『大正藏』第一二卷、三九八下〕

(44) 『撰大乘論積』六卷……「譬如由一金錢營覓得千金錢。非一日得千」〔『大正藏』第三一卷、一九四中〕

(45) 『略論安樂淨土義』(『淨全』一卷、六六九上)の引用。

(46) 『大方廣佛華嚴經』卷第五二、如來出現品(佛陀跋陀羅譯)……「佛子、假使乾草、積同須彌。投火於中、如芥子許、必皆燒盡」〔『大正藏』第一〇卷、二七七上〕

(47) 頭註③のごとく底本には「非」と作るが諸本によった。また直後の
豈可得言百年之薪、積半日不盡乎」〔『大正藏』第四七卷、二中〕

文においてその文意がとれないために先ほどの「非」をこちらの文脈の中で訳に反映させた。

- (48) 「癖」は『略論』に基づき「躓」の意で訳出した。
- (49) 『略論』……「又如躓者、寄載他船。因風帆勢、一日至千里。豈可得言躓者、云何一日至千里乎」(『大正蔵』第四七卷、二中)
- (50) 『略論』……「又如下賤貧人、獲一瑞物、而以貢主。主慶所得、加諸重賞。斯須之頃、富貴盈溢。豈可得言以可有數十年仕、備盡辛勲、上下尚不達歸者。言彼富貴無此事乎」(『大正蔵』第四七卷、二中)
- (51) 『略論』……「又如劣夫以己身力擲驢不上。從轉輪王行。便乘虛空飛騰自然。復可以擲驢之劣夫。言必不能乘空耶」(『大正蔵』第四七卷、二中)
- (52) 『略論』……「又如十圍之索千夫不制。童子揮劍瞬頃兩分。豈可得言一小兒力不能斷索乎」(『大正蔵』第四七卷、二中)
- (53) 『略論』……「又如鳩鳥入水魚蜂斯斃。犀角觸泥死者咸起。豈可得言性命一斷無可生乎」(『大正蔵』第四七卷、二中)
- (54) 『列異伝』……「子安行道、逢得鶴之人。子安脱衣、買鶴而放。後子安死。其墳樹上有鶴、嗚呼子安。嗚三年鶴死。破墳見子安蘇生、曰、我昔買鶴放畢、今鶴代我命」(吉田隆英「仙人子安のこと」『日本中国学会報』三三三、一七一)
- (55) 『大智度論』卷三〇(『大正蔵』第二五卷、二八三下)、『論註』(『大正蔵』第四〇卷、八三六中)に出る。
- (56) 『論註』……「業道經言業道如秤。重者先牽」(『大正蔵』第四〇卷、八三四中)
- 『略論』……「經言。業道如秤。重者先牽。」(『大正蔵』第四七卷、二中)
- (57) 『遺日摩尼宝經』(支婁迦讖訳)……「佛言、如是迦葉、菩薩數千巨億萬劫。在愛欲中爲欲所覆。聞佛經一反、念善罪即消盡」(『大正蔵』第一二卷、一九一中)
- (58) 『論註』には「首楞嚴經言。譬如有藥名曰滅除。若鬥戰時用以塗鼓。聞鼓聲者箭出除毒。菩薩摩訶薩亦復如是。住首楞嚴三昧聞其名者。三毒之箭自然拔出」(『大正蔵』第四〇卷、八三四下)として、以下の『首楞嚴三昧經』上を出典とする。
- 「若闘戰時用以塗鼓、諸被箭射刀矛所傷、得聞鼓聲箭出毒除。如是堅意。菩薩住首楞嚴三昧、有聞名者、貪恚癡箭自然拔出、諸邪見毒皆悉除滅。一切煩惱不復動發。堅意」(『大正蔵』第一五卷、六三三中)
- (59) 前の二つにならない、「在」を補い訳出した。
- (60) 『大智度論』卷二四……「佛告阿難。行惡人好處生。行善人惡處生。阿難言。是事云何。佛言。惡人今世罪業未熟。宿世善業已熟。以是因緣故。今雖爲惡而生好處。或臨死時善心心數法生。是因緣故亦生好處」(『大正蔵』第二五卷、二三八中)
- (61) 『大智度論』卷二四……「是心雖時頃少而心力猛利。如火如毒雖少能成大事。是垂死時心決定猛健故。勝百歲行力。是後心名爲大心。以捨身及諸根事急故。如人入陣不惜身命名爲健」(『大正蔵』第二五卷、二三八中)
- (62) 『大智度論』卷二四……「行善人生惡處者。今世善未熟。過世惡已熟。以是因緣故。今雖爲善而生惡處。或臨死時不善心心數法生。是因緣故亦生惡處」(『大正蔵』第二五卷、二三八中)
- (63) 『論註』……「問曰。幾時名爲一念。答曰。百一生滅名一刹那。六十刹那名爲一念。此中云念者不取此時節也」(『大正蔵』第四〇卷、八三四下)
- また智顛も一念六十刹那の説を説く。
- 『摩訶止観』……「或言。一念心六十刹那。或言。三百億刹那」(『大正蔵』第四六卷、三二二中)
- (64) 「不」と「用」の合字。
- (65) 道綽は小豆による數量念仏を勧めた。
- 迦才『浄土論』……「上精進者、用小豆爲數、念彌陀佛、得八十石、或九十石。中精進者、念五十石。下精進者、念二十石」(『大正蔵』第四七卷九八中)

(66) 『維摩詰所說經』(鳩摩羅什訳)……「功德智慧以修其心」(『大正藏』第一四卷、五三七上)

(67) 『無量壽經』卷上、第十八願(康僧鎧訳)……「十方衆生至心信樂。欲生我國乃至十念。若不生者不取正覺」(『大正藏』第一二卷、二六八上)

(68) 出典不明。これがどこまでかかるかも不詳。またこれ以降、『略論』の引用である。

「十念相續、似若不難。然凡夫心猶野馬、識劇猿猴、馳騁六塵、不暫停息。宜至信心預自剋念、便積習成性、善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王。人積善行、死無惡念。如樹西傾、必倒隨曲。若便刀風一至、百苦湊身。若習前不在、懷念何可辨。又宜同志五三共結言要、垂命終時、迭相開曉、爲稱阿彌陀佛名號願生安樂、聲聲相次、使成十念也。譬如蠟印印泥、印壞文成。此命斷時。即是生安樂時。一入正定聚。更何所憂也」(『大正藏』第四七卷、四上)

(69) 仏の告げた内容がどこまでかは不明であるが、今は前述のように訳出した。

(70) 特定の大乗經典をさすものではない。道綽は『論註』を引用し、改変をしている。

「大乘經論中處處說衆生畢竟無生如虛空」(『大正藏』第四〇卷、八二七中)

(71) 『論註』……「問曰。上言知生無生。當是上品生者。若下下品人乘十念往生。豈非取實生耶。但取實生即墮二執。一恐不得往生。二恐更生迷惑。答譬如淨摩尼珠置之濁水水即清淨。若人雖有無量生死之罪濁聞彼阿彌陀如來至極無生清淨寶珠名號投之濁心。念念之中罪滅心淨即得往生。又〽是摩尼珠以玄黃幣裹投之於水。水即玄黃一如物色。彼清淨佛土有阿彌陀如來無上寶珠。以無量莊嚴功德成就帛裹。投之於所往生者心水。豈不能轉生見爲無生智乎。又如冰上燃火。火猛則冰解。冰解則火滅。彼下品人雖不知法性無生。但以稱佛名力作往生意願生彼土。彼土是無生界。見生之火自然而滅」(『大正藏』第四〇卷八三九中)

(72) 『論註』……「問曰、依何義說往生。答曰。於此間假名人中修五念門、前念與後念作因。穢土假名人淨土假名人不得決定一、不得決定異。前心後心亦復如是。何以故。若一則無因果。若異則非相續。是義觀一異門。論中委曲。釋第一行三念門竟」(『大正藏』第四〇卷、八二七下)

(73) 『論註』……「問曰、名爲法指。如指指月。若稱佛名號便得滿願者。指月之指應能破闇。若指月之指不能破闇。稱佛名號。亦何能滿願耶。答曰、諸法萬差不可一概。有名即法。有名異法。名即法者。諸佛菩薩名號般若波羅蜜及陀羅尼章句禁咒音辭等是也。如禁腫辭云、日出東方乍赤乍黃等句。假使西亥行禁不關日出。而腫得差。亦如行師對陳。但一切齒中誦臨兵鬥者皆陳列在前。行誦此九字。五兵之所不中。抱朴子謂之要道者也。又苦轉筋者以木瓜對火熨之則愈。復有人但呼木瓜名亦愈。吾身得其効也。如斯近事世間共知。況不可思議境界者乎。滅除藥塗鼓之喻。復是一事。此喻已彰於前故不重引。有名異法者。如指指月等名也」(『大正藏』第四〇卷、八三五下)

(74) 「実相身」とは阿彌陀仏の内証、「為物身」とは外用を指すものと考えられる。良忠『往生論註記』卷四(『浄全』一、三二二上)ならびに藤堂恭俊『曇鸞浄土教を開花せしめた人と思想』(『浄土仏教の思想』四、講談社、一九九五)一五三―一五五を参照。

(75) 『論註』……「然有稱名憶念、而無明由在而不滿所願者、何者。由不如實修行、與名義不相應故也。云何爲不如實修行與名義不相應。謂不知如來是實相身是爲物身。又有三種不相應。一者信心不淳、若存若亡故。二者信心不一、無決定故。三者信心不相續、餘念間故。此三句展轉相成。以信心不淳故無決定。無決定故念不相續。亦可念不相續故不得決定信。不得決定信故心不淳。與此相違名如實修行相應。是故論主建言我一心」(『大正藏』第四〇卷、八三五下)

(さいとう) たかのぶ 研究員、仏教学部特別任用教授
(そわ よしひろ) 研究員、仏教学部教授

(かとう ひろたか 嘱託研究員、非常勤講師)

(ながた まさたか 嘱託研究員、佛教大学大学院博士後期課程満期退学)

(おがわ ほうどう 学術研究員、佛教大学大学院博士後期課程)